

秋

初夜の風星のみやびを吹添ふか  
 早きにやゆるきにや秋の水心  
 まつ宵や月楹<sup>マユノ</sup>の丸きほど  
 日は暑し葉うらの哀見え初る  
 名月や故人の並べし腹の中  
 秋霜の置渡さじな朝日山  
 小雨降る秋のはつ樹々目渡しし  
 秋の雨脚のい裂けて我髪か  
 翁あらむあらば出給へ秋のくれ  
 衣さび鹿に歸らめの歎<sup>ウレ</sup>を吐く  
 色にのみ朝顔の空だのめなる

(一)小望月は待宵の月

そも草の咎何事ぞ秋の霜  
 初三の月手にさはる菊の剛き哉

宮怨

芙蓉今朝誰をふるせし風の色  
 市人に粟津問はどや今朝の秋  
 裏町は其日過ぎなり花木槿  
 朝顔を見るや紙燭も一ひねり  
 蘭の香や袴着習ふ女の童  
 吹返す高野の鐘や女郎花  
 我庵は足らぬに樂し小望月  
 名月や我をほこりに水の上  
 十六夜やなしに行く舟さし戻し  
 石を出る流れは白し花すよき

大根の肩あらはれて夜寒かな  
 水仙のしひりは寒し後の月  
 秋霜やおくれ小鳥の一つ鳴く  
 ゆく秋や日なたにはまだ蟻の道  
 醉今朝の夢路やいづこ秋の水

前文あり

幸のうづら衣や草の花  
 ふる里へ我顔見せむ不二の月  
 蝶の行く末の低さや今朝の秋

大根の肩あらはれて夜寒かな  
 水仙のしひりは寒し後の月  
 秋霜やおくれ小鳥の一つ鳴く  
 ゆく秋や日なたにはまだ蟻の道  
 醉今朝の夢路やいづこ秋の水  
 幸のうづら衣や草の花  
 ふる里へ我顔見せむ不二の月  
 蝶の行く末の低さや今朝の秋



冬

茶枕を我宇治山や初しぐれ  
 しぐるればこそ戸の音や峯の坊  
 比枝に燈を遠くかゝけて落葉かな  
 寒菊の陰や夜學の硯水  
 下伏は船まつ人ぞ歸り花  
 鳥の尾の動くばかりぞ霜柱  
 窓ひとへ白根へだてゝ冬牡丹  
 泡雪のなりとけもせぬ我世かは  
 埋火やあたり消したる老の果  
 鷹狩や初雪も見すといふ日あり  
 白骨のあなめくや枯すよき

土深く爪たてにけり力草  
 湯如減はにえるにしかぬ湯婆哉  
 出迎うてまうけの新亭初時雨  
 雪垣に我門うとくなりけり  
 山崎へ急ぐ人あり今朝の雪  
 軒近く鱒うかどふ鼠かな

芭蕉忌

去り行くや見あけ馴れにし塚の霜  
 麥奈良茶いづれか先の霜ならむ  
 四つ五器に甘んじ足るか霜の宿  
 愚耳寒し彼やは月に浮衡

利休の像

今に霜青竹朽木威なるかな

(一)十月中の酉の日に  
 行ふ伊豆三嶋明神の祭  
 を酉の市といふ、能因  
 の雨乞の歌は當社へ奉  
 りしなりといふ

水仙や此花のものと飯袋子  
 初雪やさはいへ孤婦の泣くあらむ  
 こぼる夜や玉はあしきを疵とせむ  
 年経るやふるに飽く雪を一棒す  
 萬境や春をせく雨寒の雨  
 我冬や胸朽蓮のくたし身ぞ  
 己が世のせきは知らずや庭雀  
 年内立春  
 世の善惡やいづれ今年の夜半の月  
 遠近や世に轟きの餅の音  
 雨乞は禁物ならむ酉の市









無腸句集



この肖像は無腸の友人甲賀文麗が畫きしものの摸本に據れり。

文麗は京都の畫家にて百鍊と號す。秋成が渠に與へし書中より其一節を茲に抄出す。

一小庵鹿鳴夜々と隣家は申さるる老耳きくはづしても度々の感ありどもへも行には不及候へばいよゝゝ禁足と存候近日御會面萬々可申述候不具

八月廿三日

百鍊賢兄

餘 齋

無腸句集

紫 影 編

春

山畑や蕎麥屋の軒に花薫る

伊丹村に遊びて

米搗も北へ歸るや天つ雁

(聞耳世間狙卷四兄弟は氣

の合はぬ他人の始の條)

尿ふむやあまりに奥の山櫻

梅さくや馬の糞道江の南

人の失語は咎めずともあれ

な

(一)漱石枕流の故事に據りていよ

枕にもならうものなり春の水  
春の雲ゆくゝ鶴におくれたり  
さくらゝ散て佳人の夢に入る

東風凍を解く日或人の許よ

り洛の蕪叟の計を告來る我

此叟の俳諧天の下にとどろ

くを知れよば時々得てよむ

に實に當世の作者なり然る

に其句々の麗藻なるや其文

の洒落なるには相似ぬもの

にてうちなめて只から歌を

女文字してかいつけたる様

したるはむかし蕉窓にゐく



ぐまりて杜律をうまくよみ  
 笠きてわらぢはきながら山  
 家を懐にしたる人の一すぢ  
 の教なるべし王母が鍋を霰  
 のうつといひ牡丹を天の一  
 方にといふは其語勢をまね  
 び出たるものよ又釣の糸に  
 秋風を悲び花茨しけしき路  
 に古里を思ふは其の意旨を  
 やうつしなせるならむ是や  
 かむなのから歌ともいふべ  
 くと時々人にも語りあひき  
 今や老いさりて終をよくせ

られしを羨みかつ其麗藻を  
 惜みつよも

かき書の詩人西せり東風吹て

夏

雷に落さぬ箸をほとよぎす  
 弟咲に浅黄が咲いたかきつばた  
 あなかまと青梅盗む衣の音  
 (雨月物語佛法僧の條に)  
 鳥の音も祕密の山の茂みかな

秋

武庫川にて  
 鞍かりて蹴上つめたし朝心  
 豊年  
 祭餅それが夜寒の粥ばしら  
 月は入りぬ波朝霧の明石潟  
 見あぐれば月に聲あり嶺の松  
 物のへんといふ里にて  
 秋山のしただみけりな物のへん  
 山を洗ふ雨に色なし秋の水  
 雁鳴て菊を垣根の宿かな  
 何もく、秋詠めなり須磨の里

豆崎

灰小屋をもるとも頼め秋時雨  
 秋風に聲まだ青し笹のいほ  
 渡る雁聲をから鱸の入江かな  
 月に遊ぶ己が世はありみなし蟹  
 淨几焚香のつとめは誰もす  
 なる夕例の物ぐるほしうて  
 やみぬるいとむくつけきな  
 り  
 梶の葉に硯はづかし墨の糞  
 月の秋や二百十日の二十日のと  
 朝顔に島原者の茶の湯かな  
 枕ふる翌となりけり相すまふ







非

華

集

蕎麥と俳諧は田舎ぞよきとや、しかつぶやかれし世を思へば、都はなほ柿園の昔口なる人もこそおほからめ。我難波のうら人も口網おもからぬ西山ぶりをまねぶには、蕉翁の雅致高情をも人妻のよそばかりにや見過しけむ、是を恨みと歎何某が十論古今抄俳家の説難數萬言、むなしく紙墨を費えたりな。いでやそのかみの都人は、和歌の風姿に掠の葉をかけ、手爾葉は鼻油をすりみがけるも、昨日は里村の月次にひねもすうめき暮し、けふは貞室重頼らが扉を推して、更くる夜を惜みしとか、今や和歌連歌の道場おのがどちくゝ立ちわかれて、かりにも隣に遊ばぬけなり。於是みやこの俳諧もひとかたの道と成りてより、何がしくれがしの統をよばはる人も、おほかたは蕉門の風韻をうつしまねぶには、爐邊のかけこ碗に信濃伊吹の挽おろし、又なつかしまるよみやびわざとなりんてぞ、夫も是もみやこのるなかにおとるべきかは。我友几董は御溝水の流にうぶ湯を引きて、みどろが池の蘆の角髪より、俳句の長短口に絶ゆる日なき好士なりけり、しかも其雅致を師にまなび、洒落は父に傳ふのみならず、か



ねては晋子が風韻を宗とせり。むべなるかな師は蕪村、父は几圭、此二老が師なる巴人はむかしの晋子が徒弟にしあれば、墨繩の筋たがはずもぞある。崎人この頃都に遊びて夜半亭をとむらふ、何くれの物がたりのついで、一部の冊子をとう出ていふ、是我二十年來の句帳なり、社友らこれを江湖にせよとすむを、我まどひてはたさず、幸に事さだめせよ。崎人云、兄しらすや、世を見れば詩文の自撰日を逐て戸々にいづ、和歌には市賈の撰集あり、俳士の壁に藏むべきにあらず、さらばこれをはしにことわれとや、あゝさしでの磯川瀬の古杭うたていはずばとひとり言しつと、この夜の旅寢に筆をとり侍る。此篇や師が雅致、父が洒落、かつ師祖達の風韻をも備へて、卷をひらけば彩色まばゆきばかりなり。これやるなかのはいかいの今は都に及ぶべからぬを、うまく讀みて知る人はしらむものぞ。かくいふは長柄の濱松陰なるるなか人無腸居士といふものなり。

## 自叙

明和庚寅のとしより、かりそめに記し置ける家集めけるもの數冊子になれりけり。此頃秋の夜のつれづれなるまよ、とうでてをりくよみ見るに、うたて庭の本草のいや茂りにはびこり、古井の水のながめに溢るゝが如く、いとわづらはしきばかり多かりければ、やがて筆とりてかたはしに墨ぬり打消しぬべくおもふを、其をりし人ありて、あなむざんやそが中には年ごろ人の聞知りたるもあらむ、又みづから頭いたむまで案じこうじたるもあるべし、いかにさばかり無下の事はなし給ふやと、泣くばかり制しとどめらるゝにぞ、亦此志をもうばひがたくて、さらば是を二卷ばかりに書約むべしとて、昔のも今のも、鈍きさかしきに拘らず、淡き濃き打ちまじへ、つきづしく撰びあらためつと、扱此双紙に名をかうぶらせよといへば、かの人とみに井華集と號く。いかなる故やらむ我知らず、しらざれども何となく心になひたれば、漫に表題となし置きぬ。于時天明七年丁未龜長月のはじめ、洛東聖護院の杜陰なる春秋菴にして、

几 董 詐 善 書



鶯の卯の時雨に高音かな  
 鶯の隣へ逃けて初音かな  
 鶯や伊勢路をいづる曆彫  
 感 偶 鶯の木の間の野良入  
 羽洗ふ鶯も見ゆ紙屋河  
 鶯の脛にかよるや枯かづら  
 市中 鶯の二度来る日あり来ぬ日がち  
 鶯の立つ羽音して高音かな  
 初音して鶯下りぬ白のもと

井華集

金衣公子

鶯や小太刀佩たる身のひねり  
 鶯や日の出の後の霜ぐもり  
 鶯に松明しらむ山路かな  
 新 鶯 鶯の訛かはゆき若音かな  
 梅花見にこそ来つれとうた  
 ひて 鶯よ何がこはうて逃けじたく  
 鶯の影ほし見えて初音かな  
 狂雲妬佳月 梅が香に狂ふが如し月の雲



埒もなき荆が中の野梅かな  
見苦しき疊の焦や梅の影  
梅散るや京の酒屋の二升樽

山人に花咲きぬやと尋ねれ

ば

咲き散りもいさしら梅の伏見人

をちこちや梅の木の間の伏見人

遠望

しら梅に餘寒の雲のかよるなり

墻を踏で罪得べしこの梅が宿

狼藉を従者ことわるや垣の梅

しら梅にこはそも氷雨の降る日かな

但聞人語響

梅寒し奴にくるる小盃

ぬつくりと寝てゐる猫や梅の股

から駕や梅の中行く懐手

鳥邊野舟箇の烟立ちさらで

のみと、無常迅速の世のな

らひながら、春の日の麗か

なるけしきには、人の命も

のばはる心地す

野梅咲て挽歌聞えずなりにけり

耕さぬ人に見らるゝ野梅かな

木に残る心や手折る梅の花

梅の春鰻かくばかり白かつし

詩をうたひ畫を工のあまり、

阮咸が風流をたしむ者あり

梅の窓に三線ひくや毛唐人

離別

戀々として柳遠のく舟路かな

若柳枝空ざまに緑かな

春水

わたり二つ見えて夕日の柳かな

青柳や初神鳴の雨の後

寒かりし月を濁らす柳かな

辛崎の松は花より臙にてと

いへるは、さど波やまのの

入江に駒とめて比良の高根

の花を見る哉、只眼前なる

はとありけるとぞ

比良の雪大津の柳かすみけり

犬に逃けて庭鳥上る柳かな

さし木の柳の生立ちたるを

愛して寓居の柱に書

老そめてことにめでたき柳かな

しばし見む柳がもとの小鮒市

春風如刀

顔いたき風によそ目に柳かな

大子、日射の木は、丁子の井

手を添へて引せまるらす小松哉

まないたの七野に響く若葉かな

七草に鼠が戀もわかれけり



蛤の煮汁かよるや春小袖  
寶引の宵は過ぎつゝあはぬ戀

さめたらむほど念佛したま

へと、法然上人の答へたま

(一) 歸去來賦の句

ふいとたふとかりけり  
氣にむかば念佛<sup>ホッ</sup>申せよ御忌の場

着だふれの京を見に出よ御忌詣

やぶ入の脛おしかくす野風かな

やぶ入や命の恩の醫師の門

やぶ入やついたち安き中二日

やぶ入の我に遅しや親の足

五雲東府の俳士を催して北

野聖廟奉納の句勸進し侍り

けるに

白梅や機婦にねたまぬ花一重

田家

大事がる柿の木枯れて梅の花

園日涉以成趣

荒につく畠の柳みどりせり

賣家の伊勢が軒端や猫の戀

轉び落ちし音してやみぬ猫の戀

琴の緒に足繫がれつうかれ猫

餘寒

よき衣に春の寒さをしのびけり

正月や餅<sup>ヒジ</sup>いたましき采女達

春寒く一二つ残りし雞卵酒

春水満四澤

あふれ越す野澤や芹の二番生

日は落ちて増すかとぞ見ゆる春の水

さす棹の拳にのるや春の水

五器皿を洗ふ我世やはるの水

川風寒み千鳥鳴くなりとい

へば、人をして炎暑にも寒

からしむとかや、あるは蛙

飛込むと、水音を觀じたる

言外の餘情、それらの妙境

は及ぶべくもあらねど

夕されば千鳥とぶなり春の水

磯山や小松が中のはるの水

野も山も冬のまよちやに春の水

雪に折れし竹の下ゆく春の水

畫に光琳あり俳諧に鬼貫あ

り

行く水や春のこよろの置所

市陌

繪草紙に鑲<sup>シツ</sup>おく店や春の風

春風のこそつかせけり炭俵

途にあうて手紙披けば春の風

少年行

春雨や蓑の下なる戀衣

春雨に似氣なき雷の響かな

春雨や造化へもどす莖の壓



春雨や鼻うちくほむ壬生の面

薄々春雲籠皓月

おほろ夜や南下りに東山

戯男に道踏みかへむおほろ月

あじろ木のゆるよ夜比や朧月

三盃の酒にうかれて風雲の

癖しのびがたし

しやせまし志賀の山越おほろ月

鹽山亭

落ちぬべき西山遠しおほろ月

春の夜や柚を踏みつづす小板敷

海邊の曙といふ題に

紫に夜はあけかよる春の海

春の夜や連歌満ちたる九條殿

缺盆のよし野もをかし露のたう

物咎む伏見の畑や露の臺

南都にて

熊坂に春の夜しらむ薪かな

元日の酔わびに来る二月哉

二日灸花見る命大事也

如月や一日誕す海の風

傾城に菫弱くはす彼岸哉

一休は何とおよるぞ涅槃の日

或山寺にとまりて

水におちし椿の氷る餘寒かな

奉納伊勢太神宮

ありがたさ餘りて寒し神の場

畫讚

紅梅に睡れり衛士の又五郎

紅梅に衣もどし行くや盗人等

野鳥の巢にくはへ行く木の芽かな

田家

乙鳥や雪に撓みし梁の上

燕や流れのこりし家二軒

むら燕牛の跨ぐら潛りけり

市廊

つばくらや夜の酔買の驚かす

村深し燕つるむ門むしろ

淀鳥羽のわたりにて

乙鳥や轍の小魚つかみゆく

旅意

三條をゆがみもて行く霞かな

こたつ出てまだ目のさめぬ霞かな

待つ日には來であなかまの蜆賣

干鰯やくつよじの柴や燃えむとす

遊糸白日靜

いとゆふにいと靜かなり松の風

陽炎や酒にぬれたる舞扇

まさご路や陽炎を追ふ波がしら

土脈潤起

燒寺も春來て萩のわか葉かな

かけろふや泥脚かわくくわる掘



晉子七十年懷古

夕がすみ思へば隔つむかし哉  
風の尾の我家はなるよ嬉しさよ  
海士の子や舟の中より紙鳶  
鷹のそなた長閑にいかのほり  
西行忌  
骨をもて作れば和歌の聲美也

點印筥の裏書を望んで濱の

眞砂路の遠き近きをうかど  
ひつ、句の甲乙を撰ぶに丹  
青の色をもて分ち侍る  
えりわけむ眞蘇枋の小貝海苔の屑  
傲素堂口質

雁がねも春の夕暮となりけり  
風呂の戸をあけて雁見る名残かな

客中野遊吟

紅裏は屋敷女中歎遠雉子  
雉鳴くや暮を限の舟わたし  
虹の根に雉鳴く雨の晴間かな

句合に

三井寺の鐘はくるよに雉の聲  
小松野の蕨葉廣になりけり  
土を出て市に二寸のわらびかな  
野を焼くや小町が髑髏不言

野行

抜捨てし野葱土かわく春日かな

摘草や印籠さけし尼の公  
道の記に假の葉やつくくし  
たんほよや五柳親父がしたし物

芭蕉菴の松宗和尚へ消息に

椎の葉に盛りこほすらし春の雪  
山かけの夜明をのほる雲雀かな  
起臥や身を雲介が友ひばり  
應舉が晝に

島原の歸さ

春のあはれ雉子うつ音も霞みけり  
桐油臭き駕に蛙をきく夜哉  
とびくに芹の葉伸や鳴く蛙  
啼く蛙神も初めて鳴る夜かな

三日月の影蹈み濁すかはづかな

村落

さむしろや蝶も卷込む俄雨  
舟につむ植木に蝶のわかれかな  
蜂の巢に爰源八の宮居かな  
畑をうつ翁が頭巾ゆがみけり  
苗代やある夜見そめし稻の妻  
初草に心つよさよ春の霜  
はづかすと客に隠すや田螺あへ  
亡母二十五回忌

花の雲ほさちの數と經りにけり  
咲くをさへ驚くに散るはつざくら  
禁城の御みぎりを徘徊して



(一)新古今「もろしきの大官人は遠あれや櫻かざして今日もくらしつ」

(二)「こもりく」は初瀬の枕詞

いとまあるけふまだ咲かぬ櫻哉  
散ると見し夢もひとよせ初櫻  
そよこしきあるじが接木おほつかな  
僧になる兒にはくれじ雀の子  
上巳  
雪信が屏風も見えつ雛祭  
うら店や簞笥のうへのひな祭  
雛酒や汐干を語る國家老  
雛の日や翌旅にたつ客もあり  
桃の日や雛なき家の冷じき  
墨よし浦にて  
落ちかゝる日に怖氣だつ汐干哉  
鯛を切る鈍き刃物や桃の宿

桃咲きぬ誰喰ひさしの實生より  
加持すとて群れ來る人や桃の宿  
初瀬にて  
こもりくの蜂にさよれな糸櫻  
淵青し石に抱きつく山櫻  
松伐りしあとの日なたや山櫻  
雨中多武峯  
雲を踏む山路に雨の櫻かな  
咲き出でてあらせはしなの櫻哉  
夜は嵐の吹かぬものは  
けふ來ずて見ぬ友ゆかし山櫻  
月のあかき夜はたのみある櫻かな  
東山吟歩

大阪の遊女か知らず櫻狩  
さむしろに錢置く花のわかれ哉  
勅額のたふとく霞むさくらかな  
絶壁懸河を凌て日毎に越來  
るはいと危き世渡なりけり  
篋士の嵯峨に花見る命かな  
始めて吉野山に遊びける時、  
曙夕暮の花を見ありきつと  
二日見ていかさま花の吉野山  
芭蕉翁百年忌  
花といふ論定りぬ櫻人  
大和の何來といふ人、はつ  
せ山のかたはらに蕉翁の碑

を封溝し、こもりく塚と號  
く、翁や生涯漂泊を恒とし、  
五天に白髪をいとほ  
ず、片雲の風にしたがひと  
どまる所を知らざるが如し  
雲水の香をせきとめて花の塚  
雨日仁和寺に遊ぶ  
晴るよよと見ればかつ散る雨の花  
門賣の花屋が手よりちる櫻  
かしこくも花見に來たり翌は雨  
花過ぎて雨にも疎くなりけり  
花に來て侘びよ嵯峨野の草の餅  
葉櫻のなかくゆかし花の中



須磨

秋といひし哀を須磨の山ざくら  
女夫して住持酔はしぬ花に鐘  
元日の雲かさなりてさくら哉  
夜櫻に青侍が音頭かな

分題飲中八仙

宗之瀟洒美少年

舉觴白眼望青天

酔て猶眼涼しやさくら人

慮外して祿かづきたる花見かな

植木屋の花うれぬ間に盛かな

観想

二十とせの小町が眉に落花かな

(一)「来たか」は「来たくば」の意

花競ふ寺としもなし東山

底たよく春の隅より遅ざくら

少年行

花手折る美人縛らむ春ひと夜

うちとけて我に散るなり夕ざくら

君見すや花に我等がおとし文

西行上人の意を追て鬼貫が

口拍子に倣ふ

来たか来い見ずに置てもちる花ぞ

識盈虚之有数

百花咲てかなしび起るゆふべ哉

花過ぎて吉野出る日やわすれ霜

長き日の背中に暑しおそ櫻

遅き日やひとへからける草履道

影遅し魚餌について日三竿

對酌

遅き日や清めるは昇る酔あへもの

長き日や宿替の荷の殿す

長き日を羽織著ながら寝たりけり

題しらす

蹇アシナエの顔ほがらかに春日かな

出代の跡濁さじやぬか袋

出代の身のかたづきや草枕

佐久良太比之辭

かの大臣の都に潮を汲せ給

ひし風流には似氣なけれど、

鯛の鹽竈焼といふものを製

して、各箸を下し盃を銜む

の興に乗じつゝ、やがて酔

中の吟を諷ふ、其吟二句

腸を牡丹と申せ櫻鯛

山葵酢に肝をねらふや丸炙

春眠不覺曉

春の泊鯛呼ぶ聲や濱のかた

門口に風呂たく春の泊りかな

關札やどなたのとまり春夕

僕が妻の絹著て歸る春のくれ

今著きし澤庵漬けて春ゆふべ

無聲詩



山吹や胡粉の見ゆる雨の後

有聲畫

山吹やさしぬき濡るゝ歩わたり

棣棠の影さすさては夕月夜

逆旅

山吹にめで損ひやわるい宿

白馬金鞍入誰家

重踏で今去る馬の蹄かな

重踏で石垣のほる戀路かな

重野や今見し昔なつかしき

五加木垣都の客を覗きけり

家主の摘みにわせたるうごぎ哉

奉納玉津島

おもしろき名のありがたや和歌の春

青海苔や石の窪みの忘れ汐

鮎汲や喜撰が嶽に雲かゝる

柑子を惜みて砌を圍たる人

の心こそいやしまるれ

あだ花ときけばけだかし梨花は今

いざ春に生のうら梨花は今

紺かきが竹虎モガリがくれや花林檎

月中の盗人落ちよ李花白し

安良居祭

やすらるや鬼も籠れる若草野

ばと唄の肩ぬぐ空や御身拭

朱雀野にて

菜の花や雲たち隔つ雨の山

菜の花の紀路見越すや山のきれ

雪踏にて迂る山路のつよじ哉

尋蝶夢不遇

草の戸や藥を嘗めに蝶の留主

爐ふたいで碁といふ病うつりけり

表具師が無沙汰呵りつ爐の名残

芳野の山廻りして

春過ぎて夏箕の川や藤の花

藤咲て田中の松も見られけり

白藤や猶さかのほる淵の鮎

源氏などほのめく藤のあるじかな

誰願ぞ地藏縛りし藤の花

藤橋やおもき身をこす孕鹿

花に酔ひ鳥にうかれ、ある

は青樓の宿酒に三春の曉を

おほえざるも、又風流洒落

のためにつかはるゝ奴なる

べし

死なでやみぬいたづらものよ暮の春

園の戸に鎖おろす春の名残かな

春暮れぬ酔中の詩に墨ぬらむ

對友人

行燈をとほさず春を惜みけり

大名のひと夜島原くれの春

暮れむとす春の狂ひや電ふる



草臥れて寝し間に春は暮れにけり  
還俗のあたまた痒しや暮の春  
行く春や狸もすなる夜の宴  
めづらしと見るもの毎に春や行く  
おこたりし返事かく日や彌生盡

其具前夜無時方四のさ敷  
草の可なり茶の味も二の目  
春の山影の丁  
おこたりし返事かく日や彌生盡

(一)上句「世を背く苦  
の衣は只ひとへ」(大和  
物語)

ほととぎす古き夜明のけしき哉  
月よりは上ゆくものかほととぎす  
子規甌おとしの折からに

静座

睡氣さす魔を蹴て行くや子規  
時鳥啼くかと待てば蜘蛛の糸

芭蕉庵にて

時鳥あとは松吹くあらし哉  
ほととぎすいかに若衆の聲がはり  
時鳥呪詛の釘うつ梢より

詩仙堂の邊にて子規のしき  
りに鳴きけるにぞ、丈山先

生のわたらじなせみの小川

のといへる歌を思ひ出て

時鳥鴨河越えぬ恨かな

曉や地震の後の時鳥

時鳥天狗の磔ゆるせかし

丹青の彩をからず、うす墨

を引きはへたる如きよこ雲

小の絶間より

探幽があげほのの夢や時鳥

伏見の夜急に更けたり杜鵑

峨山聞子規

まほろしの花忘れめや蜀鳥

重ねばうとしいざ二人ねむ

春暮れの中  
大さのひら  
花の影  
おこたりし返事かく日や彌生盡



寒しとは小町が嘘よ時鳥  
曉のかねてしどまやほととぎす  
子規けふはきのふと成る夜かな

あればとてたのまれぬ哉  
翌は又きのふとけふはいは  
るべければ 西行上人

亂驚欺子規  
飛鳴の若音あやなし時鳥  
松浦佳則亭にて短冊かけに

句を望みけるに  
とばしりし墨も頓阿の杜鵑  
ほととぎす路通はもとの乞食哉  
五斗俵の地をはなるよや更衣

拾著て昔ごころや花の塵  
病む人のうらやみ顔や更衣  
誤落塵網中

町内に家振舞あり更衣  
馬の背にかろく跨る拾かな  
小袂より針ひねり出す拾かな

ある家にて  
牡丹二代連歌は劣るあるじ哉  
百兩のなき魂もゆる牡丹かな

牡丹畑小草に箸を下すなり  
或御方にて  
牡丹芳御坊主峰にさよれたり  
ねたまるよ人の園生の牡丹かな

此寺の牡丹や旅のひろひもの  
閨怨

短夜や妹がほむらの有りあかし  
みじか夜に敵の後を通りけり

旅泊曙

短夜や空とわかるよ海の色  
みじか夜を四郎兵衛が假寝かな

短夜や蟹の脱に朝あらし

後朝

短夜や伽羅の匂の胸ふくれ  
みじか夜は犬の鼻に雀かな

兵庫にて

短夜や蛸這ひのほる米俵

短夜の香をなつかしみひと夜莖  
今少しなれぬを鮭の富貴哉

なれきとやいざとけ眞木の柱鮭

兼好法師の口まねして

下戸等に酒もり過ぎそ鯖のすし

時鳥まつ頃北潟にて漁し鯖

の魚に、活ながら薄鹽きり

たるものを、早鯖というて

都方にて初鱈に代るものな

沖鹽のはやせを戀や蓼の雨

卯の花に加茂の酸莖のほひ哉

千里蓴羹未下鹽鼓といふ題



をもて、おの／＼句を合せ  
けるに

幽庵が便ゆかききぬなは哉  
かきねにきえぬ雪と見るま  
でと詠じけむ

卯の花に寒き日も有り山里は  
明けいそぐ夜のうつくしや竹の月  
白罌粟に煤はく家や加茂の里  
たれこめて祭見る家や薫す  
荒れたる家の籬さし覗きた  
れば、いやしからぬ女の里  
居とおほしくてイみるたる、  
いとゆかしくおほえけるに

卯の花や薄痘がほにしるいもの  
筥に括り添へたり著莪の花

鳥散餘花落  
かきつばた魚や過ぎけむ葉の動き  
等閑に杜若さく古江かな  
伏見任口上人の舊房にて

よし吹や若葉ながらの青籬  
嵐して藤あらはるゝ若葉かな  
崇なす樹も枝かはす若葉かな  
若葉して親と子うとき雀かな  
葉櫻に一木はざまや若楓  
囀に蟲も聲添ふ若葉かな  
奉納石清水

君が代や今も若葉の男山  
むら雨の音しづまればかんどり  
かんどり樹下に虱を捫る時  
ねぶの木カシコドリのその花鳥や布穀  
布引瀧  
山鳥の尾上に瀧の女夫かな  
瀧見して袖かき合す給かな  
郊外  
麥歌や野鍛冶が槌も交へうつ  
麥歌の聲まね行くや琵琶法師  
麥秋や埃の中を薩摩殿  
麥秋の草臥聲や念佛講  
泰里が姉古友洛にて薙髪し

侍るに  
うき草を拂へば涼し水の月  
家事の公務に就て東武に赴  
く菱湖に餞す  
旅涼しうら表なき夏衣  
戀  
しのぶ草顔に墨つく夏書かな  
末摘の母屋の柱に飛蟻かな  
小角力が舊きにかへる酒煮哉  
端五  
髭黒の上手又出よくらべ馬  
此非吾所以居處子  
菖蒲太刀芝居に近き家かへむ



(一)山崎宗鑑その庵の柱に「上は来ず中は暫く下は一日云々」と書き、又竹の油筒をひさぎて糊口に赤てたりき

(二)長恨歌の句

さみだれや船路にちかき遊女町  
五月雨の猶も降るべき小雨かな  
さみだれの夜は音もせで明けにけり  
さみだれの空や月日のぬれ鼠  
一日とまるは下々の下の客  
宗鑑が竹の挽香を蚊遣かな  
蚊遣木にたま〜沈の匂ひ哉  
我につらし起きて蚊をやく君が顔  
蚊柱や蜘蛛の工のうら手より  
雞の寝つかぬ宿の蚊遣かな  
蚊はつらく蚊遣いぶせきうき世哉  
君が手のつめたさ見たり惻の月  
吹折て臺のむせびし蚊遣かな

夕殿螢飛思悄然  
あるじなき几帳にとまる螢かな  
うき舟や瘡<sup>ツカヘ</sup>おさへて螢狩  
水うみの低きに就て行く螢  
みたらし河に遊て  
行く水に誘はれがほの花藻かな  
川越えし女の脛に花藻かな  
葭雀<sup>ヨシキリ</sup>や曉けて一二のみをつくし  
川風や鶉繩つくろふ小手の上に  
廣ごらぬ網や貴人の眩白し  
えものある網やうれしきひそみ聲  
有感  
生きて世に人の年忌や初茄子

(一)郭藁駝はせむしの植木屋、柳宗元の種樹郭藁駝傳に本づく

初瓜の價きのふのむかし哉  
白砧百ケ日に  
橘のかたみの衣に夏書せむ  
放參の鐘鳴るかたや夏木立  
神鳴の上りし松や夏の月  
古君の化粧上手や夏の月  
拔身かと鞘のひかりや夏の月  
堀川百首にゆひもやとはで  
早苗とりてむとあるに  
雇はれて老なるゆひが田歌かな  
湖の水かたぶけて田植かな  
玉苗やけふ手よごしの二三反  
村居

かしこくも盗人は来て水雞かな  
神樂岡崎の隠士高橋氏住め  
る庵の四隅より望るところ  
の山岳を題して、詩歌連俳  
の詠を集めらるゝに、予は  
生駒山を得たり  
角豆とる籬のそなたや生駒山  
金福寺芭蕉菴再成  
角文字のいほりに題すかたつぶり  
三日月の木末に近し蝸牛  
ひよんの葉の落ちてありくや蝸牛  
罪深く夜を寝ぬ蠅や瓜の皮  
毛蟲這ふ背中をかしや郭藁駝  
(二)



いとし子に毛蟲とりつく端居かな  
代官に化けて瓜喰ふ狐かな  
扇合に  
流れ来て撫子による扇かな  
夜歩行の露にとちたる扇かな

讀李斯傳

廁なる扇もくらふ鼠かな  
暗がりへ要のはしる扇かな  
うたよねの夢想書きとる團扇哉  
秋ならぬ閨の團扇や君と我  
祇園會  
うす痘の見えずていとし鋒の兒  
酒ゆるす醫師も見えて夕涼

(一)李斯が木倉の鼠と  
廁の鼠と其居る所によ  
りて幸不幸の差あるを  
歎せし話に據る

涼しさや遠く茶運ぶ寺扈從  
涼しさや絹著ておはす老和尚  
雨後大徳寺に遊ぶ  
涼しさやこほれもやらぬ松の露  
涼しさや花屋が店の秋の草

醉登高閣

涼しさや遣水うつるかけ鏡  
涼しさや再びともす燭の下  
あかしに遊ぶ  
こよろぎのいそ魚買はむ夕涼  
夏瘦やあしたゆふべの食好み  
撫子に霜見むまでの暑かな  
水のめば腹のふくると暑かな

(一)玉蟲は源平屋嶋の  
合戦に扇の的を出し  
平家の美人  
(二)晉の王敦色を貪り  
體を損ふ、左右之を諫  
めしかば直に婢妾數十  
人を逐ひたりき

暑き日の都や鯛の恥さらし  
金剛杖いかめしく突きなら  
し、法螺貝かまびすく吹立  
白て行くつらつきいと愛なし  
暑き日や御嶽まうでのさばき髪  
難波橋の邊に船泛て遊びけ  
るに、江南江北の遊客の舟、  
花やかに所せきまで漕出た  
り  
我を招く玉蟲出でよ涼舟  
夜涼や露置く萩の繪帷子  
醉中  
葛水や王敦を憎む女あり

くす水や浮べる塵を爪はじき  
我等亦佛子  
譬喩品の蟲殺さじと拂ひけり  
質物のいく代めでたし蟲拂  
著すぐれぬ伯母の小袖や土用干  
かなしくす小姫が顔の熱拂かな  
汗拭や左袒ぐ夏芝居  
あとさきに小魚流ると清水哉  
山寺や椽の下なる苔しみづ  
穢多村のうらを流ると清水かな  
山吹のわすれ花さく清水哉  
田中勘左衛門が愛蓮は周茂  
叔をあざむくと聞え侍りし



(一)いしは飯か藪か、不明

(二)晉の羊祜五歳の時隣人の桑田の中に金環を探らしめし事あり

か

茂助田に愛すともなき蓮哉  
いるの香に朝氣の蓮を愛す也  
わけ入るや浮葉乗越す蓮見舟

けふもまた午の貝こそ吹き  
つなれひつじの歩みちかづ  
きぬらし

夕立やけふのあゆみも未申  
夕立やよみがへりたる斃馬  
白雨や水晶のすゝの切るゝ音  
夕立や傘を借す世は情

夏日

雲の峰大工屋根屋を憐めり

鷹のおし動かすや雲の峰

かけろひし雲又去て蟬の聲  
手に持てば手にわづらはし夏羽織  
忘れるし帷子ありぬ妹が許

難波梅女が母薙髪しけるよ

し告けこしけるに

剃捨てし髪や涼しき蓮の糸

夕顔や鼠葬るめくら兒

萬民雨を悦ぶ

喜雨亭に夕風わたる青田哉

難題を集めて探りけるに

桑の實や兒にまるらす李氏が環  
瓜冷す井を借りに來る小家哉

待ちうけて醫師にすゝむる甜瓜哉

酢陶を水主あやまちそ沖脛

夏日鳥卵の羹を愛し、冬夜

鯉鮒の冷味を賞す、よろづ

に珍しきを好むは、長安繁

華の人氣なりけらし

新芋にまづ六月の月見かな

夕がほやくれと呼ばるゝ油賣

晝顔にしばしうつるや牛の蠅

孤村

禰宜ひとりみそぎするなる野川哉

名越の神事終れば、やがて

水面に立てたる五十串を拾

ひて、農家の守護となす事

かねて近在の土人川岸に聚

り居て、我一と争ふ事也

いぐし奪ふ人の羽音や御祓川



あかつきの神鳴はれてけさの秋  
秋立つや宵の蚊遣の露じめり

形影自相憐

起きくの鏡するどしけさの秋  
馬鹿づらに白き髭見ゆけさの秋

立秋の翌庚申なりければ

明けてけさ鍋の尻かく秋の聲  
初秋や旭出ぬ間の寺まるり

日々醉如泥

今朝秋の腹に酒なしものの味

乞巧奠

振袖の憂をはたちや星祭

梶の葉に配りあまるや女文字  
浪越さぬかさぎの羽や天の川

事しけき女をあはれむ

髪とくをせめて願や星あふ夜  
星合も山鳥の尾の別れ哉

乙未 秋十唱

よみ哥をひそかに星の手向哉  
瘡落ちてあさがほ清し幟の外  
彩らぬ切籠の總に秋の風  
島原や踊に月のむかし顔  
桔梗なら女郎花なら露にぬれて  
やはらかに人分けゆくや勝角力  
花火盡きて美人は酒に身投げけむ

(一)美少年は美少年と  
同意

乞兒かへる徑の木槿しほみけり  
蟲聲非一 おほとのおぶら白きまで  
賭にしてたうがらし喰ふ涙かな

感懐

松風にかなしき聲や高灯笼  
宵闇の氣のおとろひや高灯笼  
死なでわれむかしの戀を魂祭  
魂棚の親に見せけり錢五貫  
魂棚や腰ぬけどのの居はからひ  
攝待の茶にかき立る藥かな

やぐらかたすかしなどは聞

きなれたる手なるを、著聞  
集に古き名の見えたるぞい

とゆかし

ことし又きやつに勝れな腹くじり  
御相撲や五年前見し美少年  
胸あはぬ衣かづきけり角力取  
關取や妻は都のをみなべし

遊高臺寺

萩に遊ぶ人たそがれて松の月  
御しのびの下山や萩のから衣  
萩の風北より來り西よりす

優妓中村鯉長はかねて佛の

道に志深く、四天王寺の邊  
に終の栖をもとめ、柴の戸  
に明くれかよる白雲を、い



(一)杉田望一は山田の人、盲人にして俳諧をよくす、寛永七年歿

つ紫の色にぞなさむといへ  
る法然上人の御詠歌を念じ  
つよ、終にめでたき往生の  
素懐を遂けたり、彼が所縁  
の者追悼の句を求めけるに  
紫に見よや桔梗を手向草  
きちかうの露にもぬれよ鞠袴  
薺や稚き足に蚤のあと  
薺や悵氣せぬ妻うつくしき  
朝いする人をおどろかして  
蚊屋はづせ薺の花の赤む程に  
鉢植の薺も見ゆれ檜垣舟  
ある人の別墅にて

葉がくれに蟲籠見えけり庭の萩  
おもかけの幾日かはらで女郎花  
生添ふや小松が中のをみなべし  
伊勢のつと入といふことを  
頓入りて望一に誰とさよれけり  
市に隠る二百十日はきのふなり  
島原や躍に月の昔顔  
又平が晝もぬけ出でて躍かな  
ふり付の飯くひこほす躍かな  
つよみ合ひし夫婦出くはず躍かな  
電光石火の世を觀する人あ  
れば、戀慕の間に身を惑ふ  
ものあり

(一)鬼貫の「面白き急  
には見えぬすゝき哉」  
の句によりていふ

稻妻やみそか法師は老なりき  
稻妻や隣の藏も修覆時  
稻妻や壁を透けさる蜘蛛の足  
雨後  
稻妻や空にも雲の忘れ水  
稻妻や山城の山河内の河  
稻妻のをさまるかたや月の雲  
鬼貫五十年懷舊  
淋しさのとしく高し花すゝき  
刈取りてもとのみだるゝ薄哉  
東城より歸さ、しらすかふ  
た河の際より、松間の不二  
をかへり見る所あり

伸上る富士のわかれや花すゝき  
朝露や膝より下の小松原  
夜坐閑  
蟲の聲草のふところ離れたり  
鳴神のたえ間や夜半のきりくす  
蘭の香や雜穀積みたる船の底  
蘭を愛す賓主の座いまだ定まらず  
寓居園中十三唱之内  
物しらぬ妻と撰ぶや蟲の聲  
今借した提灯の火や草の露  
旅せよと我背にあまる藜かな  
稻荷山  
とんほうに蝨飛びかつ朝日かな



古墳添新土

なき人のしるしの竹に蜻蛉哉  
焼捨の人のむくろに秋の風  
つり鐘に椎の礫や秋の風  
秋風や捨てば買はうの越後縞

たかうなを握りもちてとい

へる兒とは、またやうかは

りにたれど

露草や家中の兒の剃りこかし  
朝霧や施米こほると小土器  
朝霧や一人起きたる臺所  
霧こめて途ゆく先や馬の尻  
霧深し何呼ばりあふ岡と舟

八月十四日新居會

八九分に新酒盛るべし菴の月  
待宵をたど漕行くや伏見舟  
月前懷古

名月や朱雀の鬼神たえて出す

新月に蕎麥うつ草の菴かな

水ばなに月澄み渡るひとり哉

湖上

名月や辛崎の松瀬田の橋

青樓曲 二句

名月や金でつらはるかくや姫

月今宵やり手が歌の昔ぶり

送夕陽迎素月

(一)源氏横笛の巻に、  
兒の箏を握りもちて食  
ふ様を寫せり

(一)「月見れば千々に  
物こそ悲しけれ」の歌  
による  
(二)「かざめ」は蟹の一  
種

草の戸や秋の日落ちて秋の月  
まつ毛にも露おく秋や夜半の月  
清夜の吟

うち曇る秋は多けれ月今宵  
名月や蟹のあゆみの目は空に

良夜雨

見ぬ月の千々に悲しき雨夜かな

船頭と月見あかしや肴きれ

浅河や月をよけ行く歩わたり

駿府の旅寢を思ふ

名月に富士見ぬ心奢かな

わかのうら

ゆく月や國なきかたに田鶴の聲

欠して月ほめて居る隣かな

待宵は曇り良夜は雨を帯び

たり

十六夜は雲一つなき寒さ哉

十六夜や闇より後の月の雲

十六夜やかざめを送す汐がしら

悼太祇

十六夜やひとり缺けたる月の友

臥待月の夜湖邊の水樓に遊

びて

月しろや金の波をまくら上

黒谷の初夜きく月の野川哉

返照らす有明の月や小便所



戀  
夜べ逢ていとどなつかし秋の暮  
何いそぐ家ぞ火とほす秋の暮  
かなしさに魚喰ふ秋のゆふべかな

旅思

馬下りて馬夫がわかれも秋のくれ  
朱をそよぐ入日の後は秋の暮  
衣著よと母の使や秋のくれ

述懐

老いそめて戀も切なれ秋夕  
白箸の翁といへるものは、  
元政上人の隱逸傳にも見え  
侍りしか

たうがらし賣る白頭の翁かな  
うき旅や酒に擲つたうがらし  
待戀

幾度か礎うちやむよそごころ  
人妻の隣うらやむきぬた哉  
熟柿ウレガキの落ちてとばしる砧かな

遊子

ひとの國にやと馴るよ夜の砧かな  
比叡に通ふ籠の家のきぬた哉  
指うちてしばらくとやむ砧かな  
行く舟に遠近かはるきぬた哉  
仁和寺や門の前なる遠砧  
衣うつよ田舎の果の小傾城

矢背の竈風爐にある人を訪

ひて

養生の夫婦別在り鹿の聲

西行上人の世にこのもしき

住居なりけりとよみ給へる

柴の戸

柴の戸のいやしくもあらず鹿の聲  
戀ひくゝて田に踏みかぶる男鹿かな  
月となり闇となりつゝ鹿の戀

旋轉俯仰發揮我巨巨之聲

韻不凡

立ちされば五歩に聲ある添水ソホツ哉  
案山子から苗一筋や秋の雨

草取りし笠の辛苦をかどし哉

田疇荒蕪

燒帛のけぶりの末に野菊哉  
あし早き雲の蹴てゆく鳴子かな  
早乙女も引板曳く秋となりにけり

題美人

ことし米西施が胸につかへけり  
馬わたす舟にこほるとや今年米  
鞆入に樽提けて來る新酒哉  
駒迎當時の歌仙誰々ぞ

源氏物語をよみける折ふし

物のあやも暮れて猶吹く野分哉  
かなしさも破れかぶれの野分哉



野分の夕杜子美が禪はづれけり  
乞食にも臥戸のあればのわかかな  
雨風の夜もわりなしや雁の聲

題雁字

きれぐの雲や雁ゆく五字七字  
米蹈の腹寒き夜や雁の聲  
井伊殿の御拳見ばや小鷹狩  
落鮎や鳥もひたす雨の暮  
今は身を水に任すや秋の鱒  
澁鮎を炙り過ぎたる山家哉  
捨る程とれて又なし江鮭  
鷓わたる桂のあした加茂の暮  
信濃路を過るに

(一)秋になりて鮎の長  
じて背に錆色の斑紋生  
ずるを澁鮎とも錆鮎と  
もよ

駕舁は鳥ぬし也蕎麥の花  
花そばや立出て見ればましろなる  
二三升蕎麥粉えまほし我鳥  
花か穂かもみぢか蓼の紅は  
山河の野路に成行くや蓼の花  
九日  
けふの菊秋の泣顔洗ひけり  
太刀持の背中に菊の日なた哉  
愛菊  
掛乞に八日の菊を見せにけり  
不遠慮に公家の來ますや菊の宿  
菊を見つ且後架借る女かな  
酒を出すうしろの音や菊鳥

秋悲し白菊の色に染む事

田家

今いぬる隣の客に門の菊  
此隣菊に琴弾く門徒寺  
丸盆に白菊を解く匂かな  
わざくれに小菊買ひけり宵薬師

雲母阪を下りに

手折り捨る山路の菊のほひ哉  
紫に似すてゆかしき野菊かな  
時雨のいそぎに此夜の月も  
曇勝なれば  
空暗し月やもひとつ牛祭  
秋の月千々に心を碎ききて

こよひ一夜にたへずもある

哉

月にたへぬ今宵ひと夜の寒かな  
蕪叟判句合  
後シテの面や月のやせ男  
加賀の千代尼身まかりしと  
息白鳥よりせうそこせしか

ば

來る雁にはかなき事を聞く夜哉  
二柳が東行に  
椎の實の落ちて音せよ檜笠  
芭蕉菴にて  
白露の百歩に茸を拾ひけり



紅茸やうつくしき物と見て過る

嵐山一周忌

鳴立てひととせふりぬ此のふべ  
夕まぐれ鳴立つ澤の忘れ水

思ひいでても袖はぬれけり

蕪翁と曉臺が湖南の旅舎に

遊ぶ

さす月もあな冷<sup>スサ</sup>じの九月 欄

後苑

ひとりはえて一つなりたる瓢かな  
夕風やしぶく動く長ふくべ  
草枯れて人にはくすの松むしよ

渭堤の輻湊亭に東行の離盃

をとりて

残菊にさめじと契る鬱金香

草菴を立出るとて

歸來る日も松に見よ月の秋

於粟津芭蕉堂薙髮

稻刈て麥に田がへす我世哉

大魯判句合

瘦臍に落穂よけ行く聖哉

しばらくは北へ流れつおとし水

亡父二十五回法會 小序略

雨露の舎あればぞ法の秋

由男が舞臺納に

色かへぬ松のはれ着や蔦紅葉

山莊

手折り置きし紅葉かけろふ障子かな

桂州和尚の隠栖を尋ねて

何の木ぞ紅葉色こき草の中

さながらに紅葉はぬれて朝月夜

遊仁和寺

君知るや花の林をもみぢ狩

梅ヶ畑といふ山里にて

薪樵る山姫見たりむら紅葉

高雄山二句

よし野の櫻は一目に千もと

の花を見そなはず

一もとのひとめに餘る紅葉かな

紅楓深し南し西す水の隈

長月の末木曾の溪に分け入

るに、丹山碧水驛旅の目を

よるこぼしめ、將また迅速

の感をなさしむ

かけはしにけふも壺ある紅葉かな

王周防國より、信州へわたる

天産僧と同行して途中に別

るとて

わかれ路や草の錦を裁おもひ

鳥居嶺

椽の木の秋を剥がると嵐かな



(一)宇治拾遺物語卷一、丹波國篠村平草生の事の條を見よ

朝寒に鉈の刃にぶき響かな  
あさ寒や水囉ふ家まだ起きず  
咳く人に素湯まるらする夜寒かな  
めかれたる松茸市の夜寒哉

不淨說法したる、僧にはあ

市に出るひら茸うりは法師かな  
茸狩の柴に焚るよさくらかな

倣七步詩

柚を焼くや味噌は釜中にありて泣く  
柿割て君思ふやのうら問はむ

懷古

むかし誰この堀越えし鴨脚イナゴぞも

出づるかと妖物を待つ夜長かな

秋聲

逢阪の町や針研ぐ夜半の秋

忘れし女の暫く北嵯峨の

しるべに身をよせるしに

妓王寺へ六波羅の鐘や夜半の秋

長月三十日須磨の浦づたひ

して

はるぐくと来てわかるよや須磨の秋

更科姥捨の邊に杖曳きける

は九月盡の日なり

月の夜を泣き盡してや果の秋

あはれことしの秋もいぬめ

勾當の身をなく宿や暮の秋  
薺に鶯見たりくれの秋

醫得眼前瘡 剗卻心頭肉

行く秋や五月に糶しことし米

冬を待つといふ題にて

小鍋買て冬の夜を待つ數奇心



(一)芭蕉が「俳諧に古人なし」といひし語を取る

初しぐれ今日庵のぬるゝ程  
野風ふく室町がしら初時雨  
吹上るほこりの中の初時雨

信濃の文兆が夕陽樓にて

雪見ゆる峯を隠して初時雨  
難波女の駕に見て行く時雨かな

遊金福寺

しぐれ過ぎて草に落ち來ぬ松の風  
杉たつる門に蚊の鳴く時雨かな  
羽織著て出かゝる空の時雨かな  
しぐるゝや南に低き雲の峰  
るなかうど西陣に伴て

(二)芭蕉「木曾の瘦もまだ直らぬに後の月」

錦織る家見によれば時雨かな  
梅の樹の容カタチツクリすはつしぐれ  
疊屋のいなでぞありぬ夕時雨

芭蕉忌

俳諧に古人有る世の時雨かな

義仲寺

枯れくゝて光をはなつ尾花かな

東武にありて深川芭蕉菴の

正當會にあふ

ばせを忌や木曾路の瘦も此ためぞ

善光寺の路人が家に客と成

て、かゝる尊き御佛の邊近

く旅舎せし因縁の有難さに

天府公侍座

しぐれ來て園の錦をふむ日哉  
のどかさに落ちもさだめぬ落葉かな  
迹足に落葉踏み行く鳥かな  
此風の夏は吹かいで落葉かな

草庵

二度までは箒とりたる落葉かな

伏水下村氏にて

日の影の枯枝に配る落葉かな

大村鶴汀興行

元服の面起すやえびす講

貞柳が歌よまぬ日や夷講

淺草寺前紫陌紅塵

朝毎の法や旅寢の一大事

布子きて嬉し顔なる十夜哉  
藪寺や十夜にはの菊紅葉  
上京や月夜しぐるゝ御妙講

春坡が小松谷の別莊に遊て

紅葉ちるこのもかのもの忘れ花  
散りはてぬ紅葉もあるを冬の梅  
稻妻の見えし夜あけて歸花  
愚なる僧の祈りや歸花

蓼太と東海寺に遊ぶ

澤菴をやらじと門の紅葉ちる

東叡山

下りざまに又鐘きくや冬もみぢ



十月の春吹く風や海苔の屑

三阿法師が喫茶會に招かれ

しに、あるじの風流有馬涼

及の趣にさもにたり

口切の菴や寢て見る隅田川

成美あるじして、墨水の流

に舟を泛ぶに、冬枯のけし

きいと閑に、幽懷却客情を

悩す

我舟におもて合せよ都鳥

闇を鳴く沖の千鳥や飛ぶは星

水鳥や墓所の火遠く江にうつる

野の池や氷らぬかたにかいつぶり

春坡興行に

影うつる鴛のふすまやよばひ星

貫之が船の灯による千鳥かな

明石の浦浪夕陽に映じ、淡

路島山咫尺にあり

夕衛手にも來るかと淡路島

鎌倉の袖が浦にて

裾ぬるゝ浪や七里が濱千鳥

えのしま

霜いたし草鞋にはさむうつせ貝

不審公へはじめて召されけ

るに季吟芭蕉其角の三筆を

御床にかけられたり

俳諧の三神こゝに冬籠

書棚に鹽辛壺や冬籠

さかしらいふ隣も遠く冬籠

長檠八尺空自長

短檠は一尺のもので冬籠

自悔

冬の夜や我に無藝のおもひあり

まらうどに炭挽く姿みられけり

碧雲引風吹不斷

白花浮光凝碗面

茶の花の香や葉がくれの玉川子

茶の花に喜撰が歌はなかりけり

對漆翁紹朴

爐びらきや紅裏見ゆる老のさび

口きりや此寒空のかきつばた

白石城主君の御需により二

見文臺のうら書をつかうま

つりし御報いに竹島といふ

所の竹をもて爲に製せさせ

給ふ花器を給はりけり、は

た松島と申す銘字御名判等

も御染筆のよしきこえさせ

給ふにいと有がたく頂戴し

侍る

わが庵にほひあまるや冬牡丹

水落石出



冬川にむさきもの啄む鳥哉  
初霜や鳥を懼すからす羽に  
初霜や野わたしに乗る馬の息  
舟慕ふ淀野の犬やかれ尾花

芝泉岳寺懷古

石寒し四十七士の霜ばしら

尾上鐘

此鐘や袖が摺てもさゆるなり  
紙衣著ていろは教る御僧かな  
遠く遊ぶ子に囃ひたる紙子かな  
四つに折て行李にあまる衾かな

戀

恨寢の蒲團そなたへのゆがみけり

疊むとて主客争ふふとん哉  
晝も見るつれなき人の蒲團かな

花美を好む老人の剃髪したるに

るに

丹頂の頭巾似あはむ霜の鶴

箱根にて

關越えてうれしく被く頭巾かな

少年行

頭巾くれし妹がり行く夜曇ふる

頭巾懶く切られし髪を懐に

おちぶれて關寺謠ふ頭巾かな

頭巾著し戲男うつる鏡かな

紅閨の足につめたき頭巾かな

野行

皆に比叡のはなれぬ寒かな  
明ほのやあかねの中の冬木立  
冬木立月骨髓に入る夜かな  
草の葉の霜より明けて山かつら  
結構な天氣つゞきや草の霜

海寶禪寺

鶯のうしろ影見し冬至かな  
いまそかりし師の坊にあふ枯野かな  
鰻喰ひし犬狂ひ臥す枯野かな  
皮剥の業見て過る枯野かな  
大佛を見かけて遠き冬野かな  
大根引といふ事を

水風呂の貝ふくまでや大根曳  
大根引こゝら畠の字かな

淺間の麓を通りけるに、焼

亡の後三とせの春秋を經け

れども、木草生ぜず、大石

なども灰にうもれて、うす

ひ峠を越すに、駕かく者の

申しけるは、一丈ばかりも

下に赤き土の見え侍る邊り

ぞ、其昔の道なりと、田畑な

どは焼砂を高く搔きよせた

る儘にて、只徒に茫々たり

土までも枯れてかなしき冬野かな



柏山眺望

こがらしや三つに裂けたる筑摩川  
風にあらしそふごとし鐘の聲

慶子上京に

顔見せや北斗に競ふ炭俵  
顔見せや矢倉に起る霜の聲

江戸にて

顔見せやしばらく冬の初日影  
煎麩に咲くや此花露のたう  
鰻を煮る汁なむくとこほれけり  
河豚好む家や猫までふくと汁

燈下獨酌

煮凍や精進落るかねのこころ

煮氷やもろく折れたる萩の箸  
活きて居るものにて寒き海鼠かな  
敏馬浦客中

瘦葱にさかな切込む磯家かな  
砂を吹く家の棟川や冬嵐

島田の手布は驛吏なりけれ

ば、臺輿など下知して嚴重

に大井川の岸まで送らる

やすき瀬や冬川わたる鶴の脛

金谷の庄家河村氏は古舟と

いへる俳士にて、曾祖父は

如舟といふ、芭蕉翁の門人

なり、一とせ嵐雪此家に泊

(一)夫木集十八「初雪  
にしろしのさをは立て  
しかどそことも見えぬ  
越のしら山」

りて、大井川に舟ある如し  
花の雪といふ句を残せりと

ぞ、予もせちに留められて

鵲の霜の一夜をやどり哉

駿府の時雨窓に三日杖をと

どめて、一夜葛人が樓上に

更るまで酒うちのみて

沖津鯛冬の山葵もたどならね

熱田奉幣

馳折をししばらくおろす神樂哉

夜神樂や水涕拭ふ舞の袖

葬大魯

人をして哭しむ霜のきりくす

初雪のしろしのさをや草の莖

初雪や青物市のよめがはぎ

甲辰冬別荘におのくを招

き一夜俳諧催しけるに、明

方より初雪の降出ければ

幸のこほると雪や草の戸に

商人のよき藏いやしけさの雪

恐是五侯家

誰門ぞ雪に寝ぬ夜の魚の骨

盤銅の火は炎々と雪見かな

イめば猶ふる雪の夜道かな

原驛

富士に添て富士見ぬ空そ雪の原

薩埵峠望嶽亭



晴るよ日や雲を貫く雪の富士  
鮮き魚拾ひけりゆきの中

畫贊

(一)蕪村「鳥羽殿(五  
六騎急ぐ野分かな)」

鳥羽殿へ御歌使や夜半の雪  
池水にかさなりかゝる深雪かな  
駕の戸の右も左も深雪かな  
いたく降ると妻に語るや夜半の雪

青樓曲

二日見る雪の迎や手代ども

傲古今集物名 茶屋

しなのぢや小田は粉雪に蕎麥島

題田家

終の角をかくすや今朝の雪

旅人に我糧わかつ深雪かな

歸樂孝子を養て老の後を樂

まるよを竹に寄て壽くとて

杖となるたかうな得しや雪の中

浪速人手飼の犬を亡ひしを

深く惜みて、追悼の句を乞

ひけるに

足跡の梅花なつかし雪の朝

古硯銘

鈍きものまづ氷るなる硯かな

題墨

平仲が空泣をかしうす氷

出づる日や風に吹るよ薄ごほり

胼の手を眞綿に恥る女かな

樽良が僑居を訪て

うづみ火を手して掘出す寒かな

妻の留主に煮凍さがすあるじ哉

辭義をして皆足出さぬ巨燧哉

夜著かけて容いぶせき巨燧かな

朔日や鞞殿わせてたまご酒

納豆汁必ずくるよ隣あり

おのくの喰過ぎ顔や鯨汁

むつかしと今宵はやみぬ藥喰

藥喰おほつかなさ人に誘ふ

鳴海の千代倉が門前を乗打

すとて

かたぶきし水彌氷る盥かな  
わきも子が油こぼれり玉櫛笥

郊外

寒き野を都に入るや葱賣

春秋をぬしなき家や石露の花

炭屑に小野の枯菊にほひけり

苦哉名利人 樂矣乞兒身

から鮭に名利のあぶらなかりけり

乾鮭や挽けば木のはし炭の折

去來七十年忌

まねし人のゆかしや夜半の鉢叩

戀

凍え來し手足うれしくあふ夜かな

(一)夫來「帯くせまね  
ても見せん鉢叩」



盃は預けおくなり冬の梅

所思 桑名にて

白魚やさぞな都は寒の水

寒月や行ひ人の赤はだか

寒月に照りそふ關のとざし哉

寒聲やあはれ親ある白拍子

寒垢離やひととせ見たる角力取

畫讚

守武の水涕おとす火桶かな

火桶抱て草の戸に入るあるじ哉

駢拇の身を墨染や桐火桶

足袋賣の聲うち曇る師走哉

水仙にたまる師走の埃かな

(一)駢拇は足の大拇指と第二指との連りたる畸形をいふ、「墨染」原本「黒染」とあり、今改む

英が畫に

枯尾花醜き小町臥りけり

酒を聖賢として口がしこき

男あり

師走ぞと呵る妻あり舌ありや

餅搗の日も幸齋が茶の湯かな

醉李白師走の市に見たりけり

亡父大祥忌

佛の三とせをいだく昏衣かな

同十三周

月雪に集めてかなし筆の物

右は其雪影集に遺句七十餘

をもて、百韻を綴りし意を

述侍る也

同二十五回

寒月にうつし見む我かこち顔

哭亡師 終焉記略之

から檜葉の西に折るゝや霜の聲

同期年

おこたらぬ月日の數珠や一廻り

松浦公甫還曆賀寄松祝

松千とせ算へもどせや古ごよみ

人住ますなりぬはしらの古曆

老懷

わかき人に交りてうれし年忘

除夜青樓に遊ぶ

年かくすやり手が豆を奪ひけり

酔て寢た日の數々や古曆

うそ寒う畫飯くひぬ煤拂

行く年や古傾城のはしり書

年のくれさる御方へ招かるゝ

春届く文したよめつ年籠

大路のさま松立て渡し、行

きかふ人のあわたしけな

る中に、家々の神わざいと

まめやかに見ゆるぞ、又な

くめでたき心地せらる

年一つ老行く宵の化粧かな

八十の老に親あり年木樵



跋

昔の五元集は其角先生自撰びみづから淨寫して匣底にありしを傳へて人の祕藏し侍りし也。さるを年經て延享の比旨原なる人乞得て梓行し、世にあらはれしものなりとぞ。夫よりかみつたかた、あるは今の人も家々の句集すくなからずといへども、多くは後人の意に預る所にして、晉子自撰の如き花實配當變化自在なるは彼五元集を權輿と謂ひつべし。吾師や春夜といひし弱冠の比より蕉門の深きを探り、晉子のひととなりを慕て筆意を摸し風韻を學ぶの志大なりしかば、彼五元集に倣ひ家の集を筆記せり。人たまくと乞ひて閱せんことを望めば、師云、いまだ稿を脱せず、自得の期を待つべしと。余其春秋を待つに日あらむことを歎じ、しきりに勧めて先づ初編を木にゑらせ、三都の書肆に託す事とはなりぬ。

寛政元年己酉春

門人

下村氏春坡識  
平村氏杜栗書

夜半亭藏板

春泥發句集



抑維駒父の遺稿を編集して、余に序を乞ふ、序して曰、「余會て春泥舍召波に洛西の別業に會す。波すなはち余に俳諧を問ふ、答て曰、俳諧は俗語を用て俗を離るゝを尙ぶ、俗を離れて俗を用ゆ、離俗の法最もかたし、かの何がしの禪師が隻手の聲を聞けといふもの、則ち俳諧禪にして離俗の則なり。波頓悟す、却て問ふ、叟が示すところの離俗の説、其旨玄なりといへども、なほ是れ工案をこらして、我よりしてもとむるものに非ずや、しかじ彼もしらず我もしらず、自然に化して俗を離るゝの捷徑ありや。答て曰、あり、詩を語るべし、子もとより詩を能くす、他にもとむべからず。波疑て敢て問ふ、夫詩と俳諧といさゝか其致を異にす、さるを俳諧をすてて詩を語れと云、迂遠なるにあらずや。答て曰畫家に去俗論あり、曰畫去俗無他法、多讀書則書卷之氣上升市俗之氣下降矣、學者其慎旃哉、それ畫の俗を去るだも筆を投じて書を讀しむ、況や詩と俳諧と、何の遠しとする事あらんや。波すなはち悟す。或日又問ふ、いにしへより俳諧の數家各、門戸を分ち、風調を異にす、いづれの門よりしてか、其



堂奥をうかどはむや。答て曰俳諧に門戸なし、只是俳諧門といふを以て門とす、又是畫論に曰、諸名家不分門立戸、門戸自在、其中、俳諧又かくのごとし、諸流を盡して、これを一囊中に貯へ、みづから其よきものを撰び、用に隨て出す、唯自己の胸中いかんと願ふの外他の法なし、しかれども常に其友を撰て、其人に交るにあらざれば、其郷に至ることかたし。波問ふ、其友とするものは誰ぞや。答、其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ、日此四老に會して、はつかに市城名利の域を離れ、林園に遊び、山水にうたけし、酒を酌て談笑し、句を得ることは、専ら不用意を貴ぶ、如此する事日々、或日又四老に會す、幽賞雅懷はじめのごとし、眼を閉ちて苦吟し、句を得て眼を開く、忽ち四老の所在を失す、しらすいづれのところに仙化し去るや、恍として一人自存む、時に花香風に和し、月光水に浮ぶ、是子が俳諧の郷なり。波微笑す、つひに我社裏に歸して、句を吐くこと數千、最も麥林支考を非斥す、余曰麥林支考其調賤しといへども、工みに人情世態を盡す、さればまゝ支麥の句法に倣ふも、又工案の一助ならざるにあらず、詩家に李杜を貴ぶに論なし、猶元白をすてざ

るが如くせよ。波曰叟我をあざむきて、野狐禪に引くことなけれ、畫家に吳張を畫魔とす、支麥は則ち俳魔ならくのみ。ますく支麥を罵て、進て他岐を顧みず、つひに俳諧の佳境を極む。をしむべし一旦病にふして、起つことあたはず、形容日々にかじけ、湯藥ほどこすべからず、預め終焉の期をさし、余を招て手を振て曰、恨らくは叟とともに流行を同じくせざることをと、言終て淚潸然として泉下に歸しぬ。余三たび泣て曰、我俳諧西せり、我俳諧西せり。」

右のことばは夜半茗話といふ冊子の中に記せる文なり。夜半茗話は余が几邊の隨筆にて、多くもろくの人と討論せしことを雜録したるものなり。しかるに其文を其まゝにて、此集の序とするはまことに故あり、此文を見て波子が清韻洒落なるや、其ひととなりを知て、その句のいつはりなきことを味ふべし。かの虎の皮を引きかうたる羊に類すべからずといふことを、洛下の夜半亭に於て、六十二翁蕪村書。

于時安永丁酉冬十二月七日



春泥發句選

春泥發句選

春之部

元旦

(一)「申はは「申さば」と讀むべきか

ことぐく申は盡きじ花の春  
けさ春の氷ともなし水の糟  
春たつや靜に鶴の一步より  
素袍著た酢賣出こよ花の春  
等持院寓居の頃

元日や草の戸越の麥畠

元日雪ふる

野一遍雪見ありきぬ雜糞腹

福壽草

ひともとはかたき苔や福壽草

鏡開

うれしさや養君のかどみ割

學寮や祖師の鏡のあぶり喰

寶引 羽子板

寶引の味方にまるるおとな哉

羽子板の一筆書や内裏髪

猿曳 年玉

猿曳の村へ來たるよ呼子鳥

とし玉や抱きありく子に小人形

年だまやわび寢の菴の枕上

若菜



小わらはの物は買ひよき若菜哉  
ほとよぎす渡らぬさきに齋哉  
御飛脚の堀河出てなづな哉

野老

ところ掘おのれが髪も結ふる

梅

此日ごろ梅にながるゝ野河哉  
宦高き人のにがみや梅の花  
うめ生けて是より瓶の春いくつ  
梅白く藪の緑にさす枝かな  
梅ほしの酒しほすゝめ寺の梅  
梅折て斜にし見る木曲哉  
梅の月源氏の噂女房連

御室の僧梅花一枝をたまふ

衣裡よも得たりかしこし梅の珠  
梅折れば先づ夕月のうごくなり  
醒醐出て二度に囉ひぬ梅二本  
二日目に葛家は成りぬうめの花  
伏見鶴英、任口上人の眞跡を  
恵みければ

短冊と伏見の梅を一荷かな  
梅の花美人來れり漸二更  
咄されぬ梅のあるじや道心者  
歸るさの棒の片そぎ梅の花

柳

さし柳五尺の春を見せにけり

(一)「結ふる」は「むすぶ  
ふる」と讀むべきか

(二)法華經に、無價の  
寶珠を衣裏にかくる喩  
あり

五條まで舟は登りて柳かな  
青柳や堤の春のいく所  
かたり合いかにもそこの柳哉

椿

我庭を瓶に憐む椿かな  
里の子が拾ひ首する椿かな  
落ちなむを葉にかよへたる椿哉

黄鳥

鶯につめたき雨のあした哉  
うぐひすの聲あはせけり春の奥  
鶯の聲は戸にあるあした哉  
うぐひすや銅蓮水を湛へぬる  
無人境うぐひす庭を歩きけり

御忌

八郡の空の霞や御忌鐘  
土筆 獨活

つくくしほうけては日の影ほうし  
姐あねばしやかづき上げしはうどの線  
所思

土筆經木のかよる河邊かな

東風 餘寒

東風うけて川添行くや久しぶり  
飲過ぎた禮者のつらへ餘寒哉  
いかづちの後にも春のさむさ哉  
思ひ出て藥湯たてる餘寒哉  
からびたる竹の寒さや春いまだ



自悔

四十にも餘る寒さやものの悔  
底たよく音や餘寒の炭俵  
霞

望汐の遠くも響くかすみかな  
日三竿雨になり行く霞かな  
波の寄る小じまも見えて霞哉

海苔 若鮎

生海苔の波打際や東海寺  
點々と折敷に見せる小鮎哉  
汲鮎や青山高く水長し  
柴にとる海苔大分も見えぬなり

臘月

おほろ月獺の飛込む水古し

我影や心もとなき臘月  
田圃の趣更におほろ月  
土とりのあとの溜りやおほろ月

春風

轉に獨起き出るや泊客  
撫であける晝寢の顔や春の風

紙鳶

暮れかゝる空をかこつや風  
里坊に兒やおはしていかのほり  
朝東風に風賣店を開きけり  
此糊のひる間過せよいかのほり  
紙鳶買て子心ぞ憂き雨つどき

(一)「うん吞」は鵜吞

いかのほり遠まさり行く反古哉

白魚

白魚に餘寒の海や伊勢尾張  
しらうををめぐるや老のうん吞に  
しら魚やつきまとはるよ海の塵

蛙

こもり江や雲母うく水に啼く蛙  
西行の席さわがしき蛙かな  
いづちともなくや蛙の在所  
はじめから聲からしたる蛙哉  
江の蛙生駒の雲のかゝるなり

猫戀

木づたひにいどみより來ぬ猫の夫

思ひかね夜べ寝ぬ猫の眠哉

よく見ればこはると妻やこちの猫

歸雁

あたよかな雨間を雁の呼ぶ夜哉  
沖に降る小雨に入るや春の雁  
北ぞらや霞みて長し雁の道

燕

古き戸に影うつり行く燕かな  
酒簾につばめ吹るよ夕かな  
幢の佛間へ這入る乙鳥かな

みづうみの淺瀬覺えつ蜆取

和海藻



わかめ刈る乙女に袖はなかりけり  
春深く和布の鹽を拂ひけり  
わかめ刈竹枝のことば習ひけり

落 薑

酒いたく吞てをかしや落の薑  
晋人の味噌の洒落や落のたう  
梅生けて根じめに折るやふきのたう

初午 二日灸

初午や足ふまれたる申分  
鴛の衾に二日やいとかな

涅 槃

天人の肘に泪やねはん像  
悼北邑幸順

苦き手の其人ゆかし落のたう

木芽 山葵

大原や木の芽すり行く牛の頬  
蕎麥打てば山葵ありやと夕哉  
おもしろうわさびにむせぶ泪哉

摘 草

摘草やいとはしたなき包みもの  
蕨さし木

雀 子

雀子や書寫の机のほとり迄  
人の手に巢へ戻されつ雀の子

雀子や並び居つとも黄なる背

畑 打

瘦脚や畑打休む日なたほこ

蝶

地車に起行く草の胡蝶哉  
はかなしや蝶の羽染むる鳥の糞  
屋根ふきのあがれば下る胡蝶哉

上 巳

雛の宴天井に雲畫せむ  
曲水に病後の僧の苦吟哉  
曲水や江家の作者誰々ぞ  
有常は娘育てゝ家の雛  
雛の宴五十の内侍醉はれけり

桃花盃疊のうへを流るめり

雛店に彷彿として毬かな

鶏 合

鶏合左右百羽を分ちけり  
暹羅がしは桃花の雨のみだれ哉  
鶉のしわがれ聲に名乗りけり

桃

劉阮の桃に泊るや撞木町  
風呂に見る早き泊りやもとの花  
立ちよりて萱な荒しそ桃の花

雲 雀

庵室や雲雀見し目のまくらやみ  
島原に田舎の空や夕ひばり



耕

耕に馬持てる身のうれしさよ  
たがへしやいづこ道ある谷の底  
耕や矢背は王氏の孫なりと  
十津河や耕人の山刀

田螺 鳥巢

片口のわぶと答へよ田にしあへ  
泥澄みてそこらに見ゆる田螺哉  
鳥の巢や誰か髪もじの一掴  
此殿の古巢たづねつ鳥二つ

花 櫻

舟橋の勅使まうけや花の雲  
定りの花見の日あり家の風

侘人の風盡して花ごろも

いで花に君糧包め我は酒  
花のため家に醸する主かな  
哀れなる瘦地の麥や花の道

嵯峨にて

材木の上にあらしや山櫻  
むかし道見上げて過ぎぬ山櫻  
北谷は南谷はいま山ざくら  
やま櫻うつほに折て歸るなり  
須磨寺のめしのけぶりや山櫻

晚望

燒火かと夕日の藪や花に鐘  
落つる花ひとかたならぬ夕哉

(一) 源氏若紫の北山ご  
もりの面影

莖ながら雨の日頃や落つる花  
菴の雨花相似ざるきのふには  
御室にて  
仁和寺やあしもとよりぞ花の雲  
脱ぎかけの袖や花見る舞子ども  
ことしまた花見の顔を合せけり  
西陣や花に夫婦のにしめもの  
いとどしく花に怠る簾かな  
花踏て戻る公卿の草履哉  
その寺の名はわすれたり糸櫻  
さくら狩古き手代や飯奉行  
遅櫻驗なる聖住みおはす  
壬生念佛

山吹やいはでめでたき壬生念佛

御身拭 御影供

乗物で優婆夷も来るや御身拭  
北面の御堂かしこし御影供

人丸忌

石見のや月も朧の人丸忌

出代 養父入

出代や人の心のうす月夜  
やぶ入の枕うれしき姉妹  
養父入や行燈の下の物語

山 吹

折ればちる八重山吹の盛かな  
山ぶきや雨水ひかぬ地のひくみ



苗代

宵月や苗代水の細き音  
里の犬苗しろ水を啜りけり  
松遠し苗代水に日の當る

春夜

春の夜や足洗はする奈良泊  
春の夜もかたぶく月や連歌町

春雨

春雨や野老喰うて見る女あり  
最前に起きてもよきを春の雨  
文ぬれしことわり言ふや春の雨  
迎待つ母よ娘よはるのあめ  
春の雨あるじは猫でおはすなり

春雨や財布ぬらして節句前

春さめや暮を約せし妻戸口  
はるさめや谷の古葉も流出づ  
春雨の泥や棧敷の階子まで  
はるさめや柳の雫梅の塵  
春雨に鐘のうねりや障子越

春水

しづかさや雨の後なる春の水  
玄水七十賀

探題 春燈

まな鶴をほとりの友や春の水  
春の燈油盛りたる宵の儘  
春深く蔀に透るともし哉

蠶

浴して蠶につかふ心かな  
月更けて桑に音ある蠶かな

雉子

背のひくき木瓜に身を置く雉子哉  
いで其頃竹拔五郎きじの聲

菜花

菜の花の道行人の岡見哉  
なのはなや此邊までは大内裏  
菜の花に春行く水の光かな

躑躅

白雲の根を尋ねけり岩つよじ  
苔には皺を見せたるつよじ哉

陽炎

かけろふや燃えてはしる物のひま  
陽炎に兎出てゐる檜原かな  
かけろふを搔出す鶏の距哉  
陽炎に美しき妻の頭痛かな

遅日

遅き日を追分ゆくや馬と駕  
枕して遅き日を行くのほり舟

寒食

寒食や饅に馴れたるひとり住  
爐塞

爐ふさぎや旅に一人は老の友  
物くさく爐塞くとしも見えぬなり

(一)蕪村「木瓜の陰に  
顔たぐひ住む雉子かな」

(二)蕪村「水仙や美人  
かろべを痛むらし」



爐塞て主をかしや力あし  
爐ふさぎや招隠の詩を口ずさむ

藤

しら藤や奈良は久しき宮造  
白藤や開帳前のひらき道  
なつかしき湖水の隅や藤の花  
藤棚や小詰役者の草鞋がけ

春暮 晚春

橋守の錢かぞへけり春夕  
大原の千句過ぎたり春の暮  
公家町や春物深き金屏風  
ゆく春やいづこ流人の迎舟  
狩倉の矢來出來たり暮の春

(一)小詰は俳優の下等なるもの

(二)蕪村「行春や逡巡として遅櫻」

春をしむ人や落花を行戻り  
たんほよもけふ白頭に暮の春  
ほし衣も暮行く春の木の間哉  
行春に流しかけたる筏かな

題鞍馬

ゆく春のとどまる處遅ざくら  
鶯尾は親子住み居て春をしむ  
八專の空たのめなくゆく春や  
野に山に閑人春を惜みけり

夏之部

郭公

あかつきの一言ぬしや時鳥  
烏帽子にも耳は出づるよ子規  
ほととぎす我も都のうつけ哉  
今宮の煤掃しばし郭公  
貧乏性いたどく星や蜀魂  
うぐひすの箱根や伊豆の子規  
ことかたを歩行て訪ふや杜宇  
ほととぎす啼くやあふみの西東  
ほととぎす夜もいろくの物の音  
更衣

(一)宗鑑「かしがまし我里過ぎよ時鳥都のうつけいかに待つらん」

(二)蕪村「卯の花や貴舟のみこの練の袖」

遣唐のいとま賜ひぬ更衣  
更衣ひそかに綿を著します

親殿の御物めかしや更衣  
馬場騎の背中ふくるゝ給哉

うのはな

卯の花や茶俵作る宇治の里  
卯の花に貴舟のみこの箒哉  
うのはなやかきあけ城の湛水

桐花 茨

道のべの低きにほひや茨の花  
逞しき葉のさまうたて桐の花  
ぎやうくし  
ぎやうくし日高に著て伏見哉



佛生會

灌佛や雲慶閑に刻みけむ  
灌佛やわらぢも許す堂の椽

閑居鳥

さびしさの中に聲ありかんこ鳥  
日くるればあふ人もなし正  
木ちる峯のあらしの音ばかりして

晝日中逢ふ人もなしかんこ鳥

若葉

あはしまを女の出づる若葉哉  
水音も若葉も木會の日々くくに

題橋

虹たるよもとや橋アツチの木の間より

祭

加茂衆の御所に紛るよ祭かな

牡丹

大坂の牡丹さよけぬ本願寺  
おめかけを牡丹の花の主かな  
夜ををしむ筒のほたんや枕上  
嘗て見しほたんにめでて入院哉  
御出入の李白を捜す牡丹哉  
園廣し黄なるも交る牡丹哉

夏書

人しらぬ不犯誓うて夏書かな  
似合しき聲おもふ身の夏書かな

夏書さへ晝に成りけりオモヒモノ妾

麥

覆面の内儀しのぼし麥の秋  
瘦麥や我身ひとりオモヒモノの小百姓  
麥秋や聲殿ことしはじめぢやの  
十津河や見込の武具も麥埃

豆查

餘花いまだきのふの酒や豆查汁

短夜

短夜や老しり初むる食もたれ  
みじか夜を知らで明けけり草の雨  
短夜の獲物見せうぞ桶の鮎  
みじか夜や宿立出でて小石原

蝸牛

かたつぶりけさとも同じあり所  
夜べの雨馬蘭に殖えぬ蝸牛

青梅

青うめや黄なるも交る雨の中

燕子花

かきつばた深く住む戸に鳴子哉  
鍵の手の寺前の池やかきつばた  
小瓶もてみやけにくれし杜若  
杜若門から覗く賣屋鋪  
女藤なら舟へと申せ杜若

重五幟競馬菖蒲

齋に來て幟うらやむ小僧哉

(一)豆查はカラズ  
(二)蕪村「風きのよの  
空のあり所」



ことし又おと子うみけむ幟數  
凄哉競馬左右の顔合せ  
我牛をめでてやふけるあやめ草

竹酔日

此日よと竹移したり立關前

杏

醫者どのと酒屋の間の杏かな

早苗 田植

山城へあふみの早苗移しけり

白雲や早苗とりさす水の面

早乙女やひとりは見ゆる猫背中

けふも又田植あるやら竹の奥

筍

筍やしづかに見れば草の中  
筍や脚の黒子も七十二

水雞

日も暮れぬ人もかへりぬ水雞なく

月の出に川筋白しくひな鳴く

射照

百姓の弓矢古りたるともし哉

十五から列卒にさよると射照哉

一兩を擲つ木香のともしかな

鹿遠しいでや射照の手だれ者

五月雨

さみだれの石に鑿する日數哉

五月雨や晝寢の夢にうつ山

顔につく幟のしめりや五月雨

農業

笠に入れて燧うちけり五月雨

螢

雨の夜や猶おもむろに行く螢

行く螢夜のみかうしまるりけり

夏野 夏草

夏草に狩入る犬の見えぬなり

夏野ゆく村商人やひとへもの

夏山

夏の山しづかに鳥の鳴く音哉

我井戸に桂の鮎の雫かな

河骨

水渺々河骨莖をかくしけり

藻花

藻の花やわれても末に舟の跡

若竹

若竹に蠅のはなれぬ甘み哉

わか竹や村百軒の麥の音

麥粉

むせるなと麥の粉くれぬ男の童

梅漬

梅漬にむかしをしのぶ眞壺哉

青田

むら雨の離宮を過ぐる青田かな

(一)「みかうし」は御格子  
子  
(二)蕪村「朝霧や村千軒の市の音」



百合 蓼

ゆりあまた束ねて涼し伏見舟  
脛高く摘みおく蓼や雨の園

夏木立 木下閣

夏木立いつ遁失せて裸城  
下閣の三輪も過ぎけり泊瀬の町  
谷河の空を閉づるや夏こだち  
市人の爰見立てけり夏木立  
夏木立阿闍梨の供の後ればせ

茄子

人妻のこれを饗<sup>モテ</sup>應<sup>ナ</sup>す茄子漬  
茄子ありこゝ武藏野の這入口  
なすび賣一夏の僧を音信るよ

蚊 蝨

うき人に蚊の口見せる腕かな  
雪隠に信立おはす蚊やり哉  
世やうつりかはらの院の蚊遣哉  
盃までと括りよせけり蝨の破  
燈に書のおほろや蚊屋の中

待戀

苦しさや蝨へも入らず蚊屋の傍  
植込の蚊に罵れる女かな  
物得たり蝨のかくれの妹が文  
いぶせきや子のあまたある蝨の内  
淋しさは天井高し寺の蝨  
蚊の聲の目口を過ぐるうき世哉

(一)朝いは朝寝

(二)蕪村「酔つけて誰  
待つとしもなき身か  
な」

(三)王思は魏の人、官  
九卿に至り列侯に封ぜ  
らる、性甚だ苛急にし  
て、嘗て筆をとり書を  
作る時蠅の來るを怒り  
筆を地に擲ち之を踏み  
碎きしといふ

(四)蕪村「寒月や衆徒  
の談議のはてし後」

蚊やりして武士守りぬ崩れ堀  
淺まゝや蚊屋に透たる夜のもの  
はづかしや朝いの蝨を覗く人

蠅 毛蟲

詩にあらず錦にあらず機の蠅  
あさましく蠅打つ音や臺所  
羽もいだ蠅歩きけり誰が所爲  
桃原の岸に流るよけむし哉

夏羽織 帷子

交れば世にむつかしや薄羽織  
かたびらや浴して來し人の顔  
新尼の著つよをかしや繪帷子

鮮

鮮<sup>ニ</sup>壓して我は人待つ男かな  
早鮮に王思は飯をあふぎけり  
酒呵る人もや鮮に小盃

鶉

曲り江にものいひかはす鶉舟哉  
早瀬とは鶉の火に見ゆる遙なり  
吐かす鶉と放つ鶉繩のいとまなみ

夏月

夏の月よき人加茂の歩<sup>カキ</sup>わたり  
涼しさの日枝をのほるや夏の月  
少年の犬走らすや夏の月  
ほのめける端居の君や夏の月  
檀林に談義果てしよ夏の月



川狩

(一)五鬼善鬼は後鬼前鬼とかくを常とす、役行者が使役せし大和天孫の鬼童

河狩や身にそふ陰間<sup>カゲガ</sup>かたらひぬ  
水更けぬ岸をうちゆく網の音

白雨

ゆふだちや市の中ゆくさよら波

君王の夕立譽むる臺かな

雨乞に夜ひと経よむ僧徒哉

暑

暑き日や産婦も見えて半屏風

町あつく振舞水の埃かな

雲峯

假そめの油廣がる雲の峯  
良<sup>ウシトウ</sup>のことに恐し雲のみね

元山のうしろをのほる雲の峰

題斧

つよ立て雲の峰見る五鬼善鬼

汗拭

目ざましに水ひてよ來よ汗拭

團扇

うす雲に歌や望まむ白うちは

まらう人へ團まるらせむ白き方

前帯の友むつまじき團かな

面頬<sup>シボホ</sup>をはづして將の扇哉

蟬夏蟲

さまかへて御庭拜むや蟬の聲  
蟬鳴くや晝寢しばらく旨<sup>ウマ</sup>かつし

筆のもの忌日ながらやむし拂  
上野や足利代々の蟲拂

祇園會

かしこくも羯鼓學びぬ鉾の兒

祇園會に曳くや手摩乳<sup>テナツチ</sup>あしなづち

晝顔

晝がほや子を運ぶ舳櫃根より

蓮

とく起きよ花の君子を訪ふ日なら

麻頭巾蓮見にまかる小舟哉

瓶の蓮ことしも卷葉ばかりなり

何いうて呬く舟ぞ採蓮歌

瓜

啼く蟬の岩倉たどる目疾哉  
せみの聲茶屋なき岨を通り鳧  
夏むしや夜學の人の顔をうつ

納涼

涼舟いとし若衆の小鼓は

水練を舟の御遊やゆふ涼

うかくと南草に酔ふや朝涼

簞

浴して且嬉しさよたかむしろ

もろこしの夢はさめたり簞

竹婦人

抱籠や誰に倦れて拂ひもの

蟲拂

(一)南草は烟草  
(二)手摩乳、足摩乳は  
榴稻田姬の父母



(一) 蕪村「鍋鳴らす冬夜隣を聞れけり」

(二) 蕪村「腹あしき僧こぼしゆく施米かな」

先づすよめ東寺はちかき瓜所

瓜刻むあした隣を聞れけり

冷し瓜加茂の流に枕せむ

體

あまざけや盆に居並ぶ父と母

海松 ところてん

汐満ちぬ雫うれしや籠のみる

旅人の買ひはじめけむところてん

心太酒の肴にたうべけれ

夕顔

ゆふがほや古君今の名はしらす

夕顔や用所見て置く旅の宿

施米

腰ぬけの僧扶け來る施米哉

麻

なつかしき闇のほひや麻島

あさかりてかつぱり淋し門の外

清水

川上は温泉の涌くなる清水哉

旅人の薬たてたる清水かな

かけ出の髭を絞りて清水哉

常夏

なでしこや美人手づから灌ぎぬる

氷餅

あひにあふ氷おろしや氷もち

夏萩

見つれて法師のしのぶ御祓哉  
白幣のはや西を吹くみそぎ哉



白馬寺に如來うつしてけさの秋  
 今朝の秋を遊びありくや水すまし  
 荒海に題目見えてけさの秋  
 秋たつやさらに更け行く小田の泡  
 初秋や薬にうつる星の影  
 六月間ありけるとし  
 水なしの繼橋越ぬけさの秋  
 厭はるゝ身を起されつ今朝の秋  
 水底に青砥が錢やけさの秋

春泥發句選

秋之部

(一)白馬寺は後漢の明帝が始めて長安門外に建立せし寺  
 (二)蕪村「祇園會や僧のとひよる桐が許」  
 (三)七月九日京都六道の辻なる珍置寺に諸人參詣して槇の枝を買ひて歸り、之を魂棚に置く

一葉 禪の竿を落ちけり桐一葉  
 散柳 古御所の寺になりけり散柳  
 七夕 七夕やよみ歌聞きに梶が茶屋  
 きぬぐに鵲尻を向けにけり  
 七夕や藍屋の女肩に糸  
 あまさかる鄙を川下天の河  
 とかくして夜とはなりけり天の川  
 魂祭 横買て方士戻りぬ玉まつり  
 侘しさや寢所ちかき魂祭



燈籠

行くほどに上京淋し高燈籠  
長旅の城下へ出れば灯籠哉  
高燈籠寺前の池に移りけり  
つと立てあぶら浴びたる切籠哉

踊

乙の君ある夜ひそかに踊かな  
母式部闇よりやみへ踊かな  
うかとも出て家路に遠き踊哉  
かの後家のうしろに踊る狐かな  
霜天にみちく明くるをどり哉  
うき人の顔猶深きをどり哉

相撲

賭の御馬ひき出すすまひ哉  
老いにきと妻定めけりすまひ取  
弓張に暮れ行く角力柱かな

花火

花火舟遊人去つて秋の水  
花火舟家老ながらも叔父の殿

薺

朝がほや日剃の髭も薄淺黄  
ひともの薺や日に出来ふでき  
あさがほや盟の前に新なり  
明暮と朝顔守るいほりかな

露

蜘蛛の巣に露ふりよする習かな

(一)和泉式部「うばた  
まの闇よりいでて闇に  
入る邊に照らせ山のは  
る月」  
(二)「みちく」は満  
ちと道とにかく

(一)蕪村「狩倉の露に  
おもたき靱かな」

露けしや朝草喰うた馬の鼻  
草高く露も穂に出る夕かな  
庭ゆくも露に裾とる女かな  
松明に露の白さや夜の道  
塵撫でて驚きたちぬ月の露  
狩入て露打拂ふ靱かな  
膏藥になる草とはむ原の露  
むさし野や合羽に震ふ露の玉  
萩萩  
ほろくくと秋風こほす萩がもと  
爰かしこ小家隠して岡のはぎ  
似合しき萩のあるじや女宮  
明けぬとて萩を分けゆく聖哉

なつかしき萩の葉伸びや堀の上  
一本の萩にも秋のそよぐ音

薄

山犬のかはと起きゆくすよき哉  
身がまへて芒かるなり下男

苦葺

鬼灯や老いても妓女の愚しき

木槿

白木槿夏華も末の一二りん

秋風

物換る壁の夕日やあきの風  
子の顔に秋風白し天瓜粉  
秋風や蚊屋に刀の鎖置かむ



秋扇

秋かぜの閨に残せし要かな

蜻蛉

とんほうや飯の先までひたと来る

白壁に蜻蛉過ぐる日影かな

秋蚊

秋の蚊や黙々として喰ひ行く

鱸

かよる日に貰ひ鱸や生腐り

八朔

八朔や四座の登城の袖かへす

稻妻

いなづまや雨月の夫婦まだ寝ねす

稻づまにあやしき舟の訴哉

いなづまや其箒木の梢まで

稻妻や夜もをりくの横渉し

霧 秋雲

霧雨の外面にうごく曇哉

石火矢に出行く船や霧のひま

山霧の梢に透る朝日かな

入相や霧になり行く一つづつ

霧立て遠里小野となりにけり

二色の繪具に足るや秋の雲

稻 落穂

稻の香やゆりもて運ぶ行違ひ

めでたさよ稻穂落ち散る路の傍

(一)蕪村「秋の暮迄の地蔵に袖さす」

稻ぶさや誰むすび置く宮柱

何かせむ稻刈頃のかより人

あしあとのそこら數ある落穂哉

鳴子 引板

野ねすみの辻ぐるも見ゆる鳴子哉

水盡きて引きとる息や引板の音

秋暮 秋旅

加茂の町樂も聞えず秋の暮

婚禮の家を出ればあきの暮

寺子屋のてら子去にけり秋の暮

短冊の屏風を見たり秋のくれ

しられじと旅の身に添ふ金氣哉

月

名月や此松陰の硯水

唐柜カウキに駒や繫がむ野路の月

名月や懐紙拾ひし夜の道

名月に辻の地藏のともし哉

百貫の坊に客ありけふの月

橋の月裸乞食の念佛かな

東寺寓居にて

山ぶきは社家町に似てけふの月

名月や厠にて詩の案じくせ

名月や瓶子奪合ふ上達部

夕月や驢鞍過行く驢鞍橋

月影や田ををちこちの水の音

見るものにしてや月見の小百姓



名月や金拾はむとたち出づる

月かけて砦築くや兵等

湖を月見の旅や友二人

ありとき兼裁松や月の前

後の月何か着に湯氣のもの

悼移竹叟

硯箱ふたよの月を見納めぬ

同十三回忌

乙御前や顔見ぬばかり月の前

放生會

曉の霧しづかに神の下山哉

浪黒き鰻十荷や放生會

山崎へあまれる鳩や放生會

秋夜

秋の夜をあはれ田守の鼓哉

秋の夜に江帥兵を談じけり

畑ものに秋の夜を守る焼火かな

長き夜の寢覺語るや父と母

永き夜にや讀盡きぬ若菜の下

題妓

秋の夜を何かしろ女が丸行燈

長き夜やあらし成りぬ翌の業

案山子

夕日影道まで出づるかどしかな

立ちされは形なしたる鹿驚哉

をちこちのたづきなき身のかどし哉

(一)猪苗代兼裁が會津平潟の菅公祠前に植ゑしといふ松

(二)江師は大江匡房

(三)源氏物語若菜の巻は上下二冊に分てり

(四)白女は昔の遊女にて後撰集に歌いづ

(五)古今「をちこちのたづきも知らぬ山中にちぼつかなくも呼子鳥かな」

編笠のことにわびしき案山子哉

二つあるかどし容を違へけり

俵

腰を折る五斗の脱のかどしかな

朝風に弓返りしたるかどし哉

冬瓜 糸瓜

よきものと冬瓜勸むるくすし哉

汁菜にならでうき世を糸瓜哉

江鮭 下籾

あめ來るや普請半の川堤

またしては狐見舞ひぬくだり籾

蕎麥花 穂蓼

そばの花畠の秋も後段かな

(一)後段は食事後に出す小食

花を見て蓼の多さよ此邊

草花 野菊 蘿

あつめねば花にもあらぬ小草哉

折るよりは行くに慰む花野かな

かたはらにかほちや花咲く野菊哉

藪疊半は葛のもみぢけり

代なしに譲らむといふ蘿の宿

野分

まひといき野分吹くらむ薄月夜

子狐を穴へ呼込むのわかかな

雪隠のかきがねはづす野分哉

獨居の野分ながらに朝寢かな

宿までは闇の野分や馬の上



秋水

白髭の笠木も見えて秋の水

送蕪村先生之讚州

江山の助タスケイハン況や秋添へて

葛蘭

くすの葉も吹くや鳴子のうら表  
栗に飽て蘭につく鼠とらへけり

柿

秋されや柿さまざまの物のしな

蕃椒 南草

年よりの唇いやしたうがらし  
蕃椒常世が鉢にちぎりけり  
たばことりて荒に就たる畠哉

南草干すとしても繩の中たるみ

雞頭花 葡萄

けいとこの宿や窓から答へけり  
ぶだうめす水銀盤をうたれけり

蟲 蟋蟀

乾きたる蟲籠の草やあら無沙汰  
蟲聞てたつや野人の怪むまで  
蟲籠の總角さめぬ致仕の君  
秋風に涕ナナすよりけりきりクす

九日

人心しづかに菊の節句かな

菊

宿のきく陶トウにさして憐まむ

櫻井が跡に宗長菊持參

すがりかと思はるゝ菊の開きけり

菊の香や花賣が身の袂にも

初ぎくや九日までの宵月夜

土龍妹が黄菊は荒れにけり

うたよねの顔に離騒や菊の花

雞老いぬ茄子黄みぬきく畠

とく遅く菊此頃のたのしさよ

草の戸の酢徳利ふるや菊膾

残菊

見る時は残菊としもなかりけり

菊の香や十日の朝のめしの前

栗

料足に栗まるらする忌日哉

落栗や墓に經よむ僧の前

いがぐりに鼠のしのふ妻戸哉

題 老坂

毬栗に踏みあやまちそ老の坂

蜜柑

埋み置く灰に音を鳴くみかん哉

擣衣

いねかしの男うれたき砧かな

小ともしの油あやまつきぬた哉

相住や砧に向ふ比丘比丘尼

山うばと顔見あはして砧かな

牛祭

(一)蕪村「二本の梅に  
遅速を愛すかな」



油断して京へ連なし牛祭

新米

船頭に乞ひとるめしやことし米

焼米や其家々のいせの神

新酒

父が酔家の新酒のうれしさに

買ふほどは盡さぬ旅の新酒哉

新酒や天窓叩てまるる人

つけざしの穂に出る君やことし酒

母衣かけて新酒に酔へる祭かな

初紅葉 照葉

いづちよりいづち使ぞ初もみぢ

切溜につふと見せたる照葉哉

銀杏

北は黄にいてふぞ見ゆる大徳寺

秋雨

秋雨や四方椽にも濡るゝ方

揚屋から旅乗物や秋の雨

秋雨や旅に行きあふ芝居もの

芭蕉 新綿

暮の背にばせをの雨の雫かな

何となき綿のほひや宿通り

鶉

うづら籠棚の鞍に並びけり

夜寒

明けばまた夜寒の雨戸繕はむ

(一)蕪村「初午や其家  
家の袖だたみ」

(二)鬼貫句選五、禁足  
旅の記九月二十七日の  
條参照

わざとめす地藏の綿も夜寒哉

怪談の後更け行く夜寒かな

月の洩る穴も夜寒のひとつ哉

あとさして夜寒に慮外申さばや

題 妖もの

炭とりに早足のつく夜寒哉

鹿

鹿寒く月輪どのの寝覺哉

鳴川の戸に寄る鹿や下駄の音

ぬれ色に起き行く鹿や草の雨

賓主鹿聞ぬ夜をかこちぬる

小鳥 鶉鶉





低く飛ぶ雁あり扱は水近し

探題鍛冶

月山の梢に響く秋の聲

茸

唐櫃の北山戻るきのこかな

さし上げて獲見せけり菌狩

降出して茸狩残す遺恨哉

茸山やから鐵砲の一けぶり

紅葉

紅葉見や小雨つれなき村はづれ

山づとの紅葉投げけり上り口

吹きさます酒や紅葉の焼過し

老母草 梅廬

花の時は氣づかさざりしが老母草の實

梅もどき我あり顔や暮の秋

暮秋

長き藻も秋行く筋や水の底

枯れてたつ草のはつかや暮の秋

四町なる御歌使や暮の秋

題關

月影の不破にも洩らす九月盡

禪に贈別の詩や九月盡

石女と暮れゆく秋を惜みけり

冬之部

初冬や兵庫の魚荷何々ぞ

はつ冬や戸ざし寄たる芳野殿

初ふゆは曇とのみぞ障子越

はつ冬や空へ吹るゝ蜘蛛のいと

時雨

しぐれする音聞初る山路哉

傘の上は月夜のしぐれ哉

三度まで時雨れていとど黒木馬

生きて世に寢覺うれしき時雨哉

夕しぐれ古江に沈む木の實哉

雲母行く豆腐にかよる時雨かな

江戸住やしぐれ問ひこす人のかし

衰やしぐれ待つ身となりにける

喘息に寢つかぬ聲や小夜時雨

山城のとはかは急ぐ時雨哉

妻木とる内侍の尼のしぐれ哉

むらしぐれ古市の里にしばしとて

寺深く竹伐る音や夕時雨

爐開

爐びらきやけふも灯下に老の日記

爐開や庭はあらしの樅を吹く

芭蕉忌

冬の雨しぐれのあとを繼ぐ夜哉

嵐雪祥忌

(一)蕪村「古傘の邊と月夜のしぐれかな」

(二)建禮門院に仕へし阿波内侍をよ



(一)嵐雪に其袋といふ  
撰集あるよりいふ

其集に洩せし十夜袋かな

十夜

人聲の小寺にあまる十夜哉  
燒寺の早くも建ちて十夜かな

口切

口切や寺へ呼れて竹の奥  
口切や彈正といふ人のさま

夷講 達摩忌

前髪に戀はありけり夷講  
蛭子講火鉢うれしとこぞりぬる  
達摩忌や和尚いづちを尻目なる

茶花

茶の花にきどす鳴くなり谷の坊

茶の花に文覺のやうな庵主哉

歸花

かへり花蟬のもぬけにタキモ薫す  
はよき木の梢はこよぞ歸花

雨雲の梢は奇なりかへり花  
咲出でて心ならずや歸りばな

歸花桃李の美人覺束な

草枯

いさよかな草も枯れけり石の間

霜

日三竿檜原に耐へぬ霜の色  
羊煮て兵を勞ふ霜夜かな  
手してうつ鐘は石なり寺の霜

(一)蕪村「紅梅や比丘  
より劣る比丘尼寺」  
(二)蕪村「猿どのの夜  
寒とひゆく兎かな」

織殿の霜夜も更けね女聲

落葉

あちこちとして居りたる落葉哉  
篋深にも射たる塚アツチの落葉哉  
寺ゆかし山路の落葉しめりけり  
水含む落葉わび行く草履哉  
宮つこの闇の顔うつ落葉哉

大根

冬偈ある寺にひかると大根かな  
胡蘿も色こきまぜて大根曳

納豆汁

納豆汁比丘尼は比丘に劣りけり  
反碗は家にふりたり納豆汁

翌といふ隣の音や納とう汁

齋腹イハハラの便々たりや納豆汁

海鼠

麗しく玉堂佳器にこたよみぬ  
憂きことを海月に語る海鼠哉  
海鼠ウミネズミたよみの饗應マツケしのばし聚樂御所

蠟

煎蠟に土器とりし采女かな

冬至 御火燒

雨ながら朔旦冬至たどならね  
よそながら冬至と聞くや草の菴  
天文の博士ほのめく冬至哉  
百姓ユツメに浴ほどこす冬至哉



禪院の子も菓子貫ふ冬至かな  
御火焼や積上げし傍へ先づよるな

枇杷花

輪番にさびしき僧やびはの花

木枯らしや瀧吹きわけて岩の肩

こがらしや瀧吹きわけて岩の肩

風や花子の宿の戸にさはる

木がらしの夜にゆたふる菴哉

顔見世

顔見せや伏見くらまの夜の旅

浪花

顔みせや空炷ものの舟一片

寒鐘水

寒鐘水

鴨の毛や箆打ちたよく軒の水  
かたよりにて鳥根の鴛の夕哉

千鳥

江南は鳥飛ぶなりむら千鳥

雪霰

初雪に人寒からぬ御宴哉  
客去て寺しづかなり夜の雪

何を釣る沖の小舟ぞ笠の雪

羽織着て門の雪掃く女房哉

雪の日や笠着た人をみさぶらひ

袖を出る香爐も雪の衛哉

ぬけがけの手綱ひかゆる雪吹哉

物焚て夜すがら雪の乞食哉

さす敵に矢をとり落す寒さかな

本陣に鼠の糞のさむさ哉

鐘氷る尾上の寺や月孤つ

氷

初氷許由此朝掬すれば

うすら氷や格子の透の器

琥珀には蟻氷には紅葉かな

水鳥鴨鴛

水鳥やかねて郷土の掣撰び

水とりや心の闇の流し鵜

浮鳥を石とあやまる水遠し

毛を立てて驚く鴨の眠かな

水鳥に唐輪の兒の餌蒔哉

山買うて我雪多きあるじ哉

都邊や坂に足駄の雪月夜

雪の日や隣家の童子缺木履

村人に雪の見所習ひけり

よき君の雪の礫に預らむ

夜着を着て障子明けたりけきの雪

初雪や既に薄暮の嵐より

雪の朝童子茶臼を敲くなり

霰して海老吹寄する汀かな

遠忌

その夜半の啼く音は遠し浦衛

仙鶴追善

弔へば今もきませる頭巾哉

(一)「ゆたふる」は「ゆたふる」の意か  
(二)唐輪は轡の名



冬 枯

冬がれの里を見おろす峠哉  
家遠し枯木のもとの夕けぶり

冬 野

枯野していづこくの道の敷  
伯樂が鍼に血を見る冬野哉  
生きて世に古錢掘出す冬野哉  
枯野して松二もとやむかし道  
上京の湯どのに續く枯野哉  
枯野のや蓑着し人に日の當る  
關屋より道のさだまる枯野哉  
鷹  
あたよめよ瓶子ながらの酒の君

冷めしの霞たばしる鷹野哉

鳥叫や鷹にあたへる肉一鬮  
草の戸に茶ひとつ乞へり狩の君

炭

炭うりや京に七つの這入口  
うき人の顔にもかよればしり炭  
消炭に薄雪かよる垣根哉  
炭を挽く下部ゆがまぬ心かな  
炭取に侘しき箸の火ばし哉

櫓

櫓の火にあやしき僧の山居哉  
櫓けぶる住居侘しや疊なき  
埋 火

(二)蕪村「夏百日墨も  
ゆがまぬ心かな」

(一)伊藤仁齋の物堅き  
をいふ

うづみ火に我夜計るや枕上  
おのくの埋火抱て繼句かな

冬 籠

冬ごもり五車の反古の主哉  
仁齋の巨燧に袴冬ごもり  
思ふ事戸に書れたり冬籠  
住みつかぬ歌舞妓役者や冬籠  
雉子一羽諸生二人の冬ごもり

隔なき友とさし向ひおろお

ろのみたるいとをかし

何なりと薄鍋かけむ冬座敷

水 仙

水仙や室町殿の五間床

水仙や藥の御園守るあたり

水仙や先づ揚屋から生けそむる

水仙や引きさき紙に珍重す

寒 菊

寒菊や猶なつかしき光悦寺  
寒菊やわきてかしくき蒼がち  
寒菊や四つまで園の日のあたる

冬 椿

冬つばき難波の梅の時分哉

冬 木立

郊外に酒屋の藏や冬木立  
孟子讀む郷士の窓や冬木立  
藪見ゆる貧乏柿や冬こだち



垣結へる御修理の橋や冬木立

綿帽子 綿子

里下りの野ひとつ越ゆや綿ばうし  
留主がちの夜を守る妻の綿子哉  
綿帽子士農工商の妻の體

紙子

小夜更けて昏子まららす迎かな  
弓の師の家中をありく紙子哉  
ながらへば紙子を貰ふすまひ哉  
紙衣着てふくれありくや後影  
紙子きて嫁が手利をほよみぬ

足袋 脛

扱あかき娘の足袋や都どり

あさましや足袋に足袋はく虚勞病

子の母よいく度結ぶ足袋の紐

革足袋で村あるかるゝ醫師哉

競べあふ脛の手先や寮の尼

頭巾

凧に頭巾忘れてうき身哉

頭巾さへ多田の新發意の左折

酒臭やうかれ頭巾の行違ひ

異見など投頭巾着て馬の耳

頭巾着て法師か知らじ安良殿

頭巾深しとても聞えぬ老の耳

揚虎ぞと取違へたるづきん哉

學して寝ずや頭巾の影ほうし

(一)伊勢物語に都鳥の口と足との赤きとあるに上る

(二)大抵「頭巾ちく袂や老のひが覺え」

(三)蕪村「引かうて耳を哀む頭巾かな」

(四)光茂は土佐光信の男

(五)山鳥は雌雄谷を隔てて時につくといふ、蕪村「腰抜の妻美しき巨燧かな」

(六)蕪村「靜なる櫻の木原や冬の月」

火燧

巨燧してくれる驛の馴染哉

山鳥の病妻へだつ巨燧哉

侘しさや巨燧に焦る蜘蛛の糸

圍爐裡

大原女の足投出してゐるり哉

冬月

しづかなる柿の木はらや冬の月

質置のイむ門や冬の月

寒月や穢多が虎竹に肉の影

温石の百兩握るふゆの月

塞上燈

氈帳に短檠くらし藥喰



河豚

鮓あらふいつもの男まゐりたり  
ふくと汁我が使に我ぞ來ぬ  
歸らめや鯨喰はぬ家によせし身を  
河豚汁鯛は凡にてましくける  
河豚しらす四十九年のひがごとよ  
廻文の點の長さよふくと汁  
佐殿に文覺鯨を進めけり

雞卵酒

玉子酒賓主を分つ小盃  
沫を消す内儀老いたり玉子酒  
草の戸や盃足らぬ雞卵酒  
寢酒せむ先づたのもしき雞卵百

玉子酒十重ねたる小さかづき

煮凍 藥喰

煮凍を旦夕やひとり住  
煮凍にともに箸さす女夫哉  
長言す人去れけり藥喰  
夕べ誰疊焦しつくすり喰

葱 莖菜

小灯に葱洗ふ川や夜半の月  
僕等のよと盛りけりねぶか汁  
重箱に縮ねて贈る莖菜かな  
後妻のことくくに問ふ莖菜哉  
莖おしに寺中をめぐる老女哉

鯨 鯨

寒垢離の風に乗行く歩み哉

病中唸

鏡とらば兩の鬢や枯尾花

煤拂

門口に歩みの板や煤拂  
煤拂あやしの頭巾着たりけり  
平仲の顔ともはやせ煤拂  
一函の皿あやまつやすと拂  
すゝ掃や宵のさむしろ大書院  
すゝ掃やいつから見えぬ物のふた  
きぬぐの駕も過ぎけり煤拂  
何やらむ妻火ともして翌の煤

(一)寒づくりは寒中に醸造する酒

(二)平仲は平貞文の通名、女の許にて目に水を點じて泣くまねせしを女悟りて墨を水の器に加へしかば平仲の顔黒くなれり(大和物語)

鯨舟新島守を慰めつ

一のもり突くや日來の飯の恩  
めでたしな御子達からの臺の鯨

寒造 御佛名

確の十挺だてや寒づくり  
佛名や柿の衣の僧ばかり

鉢 敲

鉢たよき頭巾まくれて鬢の霜  
愚なる御僧と申せ鉢叩  
鉢たよき右京左京の行戻り

寒念佛 寒垢離

無縁寺の夜は明けにけり寒ねぶつ  
茶を申すおうなの聲や寒念佛

年 忘



家中衆のしのびくや年忘  
 玉子吸ふ女も見えつ年忘  
 官方の武士うつくしやとし忘  
 國衆は舞子が好きで年わすれ  
 貝で呑む人をあふぐや年忘  
 腰越や鎌倉は噺年わすれ  
 醉臥の妹なつかしや年忘  
 燭まして夜を續ぎにけり年忘  
 寒聲  
 寒聲や京に住居の能太夫  
 衣配 餅搗  
 橘のむかし文庫やきぬくばり  
 百疋は握る使や衣くばり

餅つきや焚火のうつる嫁の顔  
 節季候 掛乞  
 恥しらぬ老の戯れや節季候  
 掛乞や雪ふみわけて妹が許  
 書出しに小町が返事なかりけり  
 年木樵 岡見  
 うれしさよ御寺へ年木まるらせて  
 此村に長生多き岡見かな  
 節分 追儼  
 追儼<sup>オニヤリヒ</sup>うらの町にも聞えけり  
 先生も人のすゝめや厄おとし  
 厄落し石女<sup>ウツメ</sup>年をあかしけり  
 節分やよい巫女譽むる神樂堂

(一)春正は山本氏、明  
 暦頃の名高き蒔繪師

寶舟御枕香ぞいや高き  
 やごとなき一筆がきや寶舟  
 節分をともし立てたり獨住  
 年内立春  
 宵闇に春ぞ立ちるる十日ほど  
 年ごもり  
 月もなき杉の嵐や年籠  
 歳暮  
 行くとしや月日の鼠どこへやら  
 春正があつらへ來しぬ年の暮  
 口上のせいほ使や古男  
 年のいそぎ聖の衣みじかしや  
 馬の背にまたると銀や年の暮

行く年やたどならぬ身の妹分  
 錢はさむ下部の腰や年の暮  
 ゆくとしや六波羅禿おほつかな  
 常よりも遊ぶ日多しとしの暮  
 年の市や馬士によりやる送り狀  
 名の高き茶入も見けり年の暮  
 竈塗の心しづかにとしの暮



三原の古歌を詠する  
（一）野田山本集、四

風吹くまふらふ：蟬の音の響  
夜のはらみも響の遠きこゝろ  
ほろの風止むつゆ時、身よと古  
響玉世帯ひの糸、来じや中の涼  
涼とよふ久良日、の風とよふ  
風とよふ、響玉は響玉のすね  
風とよふ、響玉の、風とよふ、響玉  
響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉  
響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉

響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉  
響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉  
響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉  
響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉  
響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉  
響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉  
響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉  
響玉とよふ、響玉の、風とよふ、響玉

蘆陰句選

ひかたなす、人まを首、ひかたなす、人まを首  
ひなはかりあらじと思ひて、百貫にはたごとてうらす、さてたにまにす、みかたなす、人まを首  
は、はつかに想あらはれぬ。おきなあさましとまどひて、いよく、すりみがくにしたがひ  
す、大に玉はまればかりになりぬ。はじめはむと云ひし人も、今は秋おほひつよきたな  
なりけるとて、蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。  
ひく、蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。  
蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。  
蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。  
蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。  
蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。蘆陰句選、といふ。



蘆 刻 回 巻

むかし丹波の國に大なる璧もたるおきな有りけり、その玉うちに光をかくしてゆかしさ云はむかたなし。人其玉を百貫にかはむといふ、翁おもふやう、かくてだに有るを光まさばあたひなほかぎりあらじと思ひて、百貫にはえぞとてうらす。さて夜に日にすりみがきけるほどに、はつかに瑕あらはれ出ぬ。おきなあさましとまどひて、いよくすりみがくにしたがひ、きず大に玉はまめばかりになりぬ。はじめ買はむと云ひし人も、今は鼻おほひつゝさたなくなりけるとぞ。されや大魯が門流蘆陰遺稿といふものを出さむとして序を予にもとむ。予が曰く、遺稿は出さずもあらなむ、いにしへより作者の聞えあるもの、遺稿出て還て生前の聲譽を減するものすくなからず、大魯はもとより攝播維陽の一大家と呼ばれて我門の囊錐なりし、さればその佳句秀吟は人おのゝ膾炙す、たれか遺稿の出るを期せむや、はた遺稿を出してかの玉もたる翁に倣ふことなかれ。門流肯<sup>カ</sup>ず、ひそかに草稿をあつめて几董に託して校合せしめ彫刻半にいたる、しかしてふたよび序を予にもとむ。ことにおいてやむべからず、取て



その草稿を閲す。嘆じて曰く、遺稿出すべし、遺稿出て人いよくその完璧をしるべし、是大魯が身後の榮ますくそのひかりを加ふるに足らむ。門流微笑して去る、このこと又序とすべし。

安永己亥孟冬

夜半翁識

大魯の遺稿を閲す。嘆じて曰く、遺稿出すべし、遺稿出て人いよくその完璧をしるべし、是大魯が身後の榮ますくそのひかりを加ふるに足らむ。門流微笑して去る、このこと又序とすべし。

蘆陰句選

嵜落ちて半は水の柳かな

岡本の梅

春之部

初空や月にもよらずさくらにも  
福壽草咲くや後に土佐が鶴

此梅や摩耶ふく夕海にほふ  
雨の梅しづかに配る薫かな  
黄昏や梅が香をまつ窓の人  
ちる梅よ春の行くへの始なる

浪花吳服町に卜居せし春

四十九のはつ春に  
ひがごとの昨日のむかし明の春  
人妻の老いけり御忌の朝詣

寒からぬはじめや春の吳服町  
野の春

高倉帝陵にて

宿直誰鶯とても留主の谷  
うぐひすの呑むほど枝の雫かな  
糸柳みじかき枝の狂ひ哉

春が來た梅ぢや芝居ぢやうかれ人  
古草に陽炎をふむ山路かな  
物おもふ人のみ春の巨燧哉

仲春



きさらぎや人の心のあたよまり  
 雁かへる夕や小田の初蛙  
 雉啼くやけふも人なき關を守る  
 雙親の日に當りたる彼岸かな  
 春雨の奈良茶は古き趣向哉  
 野外の春日のむせの春  
 田の蛙足ぬるよほどの水に鳴く  
 畔道やほの見て過る雉の聲  
 うしろより雨の追來る燒野哉

歸雁

けさ見れば今朝たちけるよ小田の雁  
 等閑に立行く雁も日和かな  
 耕や世を捨人の軒端まで

をみなへし薄も春の小草哉  
 いとまある春邊や水も田に遊ぶ  
 埋れ井の水あらはなる燒野哉  
 涅槃會  
 尼達の古き涙やねはん像  
 我友の鼓ふりけり春の雨  
 上巳  
 古雛や櫻がくれのうらみ顔  
 難波津の春四五日やかし座敷  
 ふりたてよ角落したる男鹿哉  
 正月を遊ばぬ人のさくら哉

三月九日兵庫七宮の祭禮町  
 町幟挑灯神輿御幸の行粧い

と見事也

糸櫻神輿にかけむ祭かな  
 ことも又峠にあらず花の雲  
 桃咲くやよき家建てし梓巫女  
 海も帆に埋れて春の夕かな  
 きれ風や沖中島の船だより  
 足袋脱で小石振ふや葦草  
 鼻紙に物かく春の詠め哉  
 おもひ出て庭掃く春の夕哉  
 人たる事を知るべし  
 花鳥の揃へば春の暮るよかな  
 けふ限の春に駈騎武士よ  
 山陰や菜の花咲きぬ春過ぎぬ

ゆく春や藤にかす日のはつか也  
 松の月それさへ春の名残かな  
 人の閏三月の吟  
 花過ぎて春にあまれる日數哉  
 春盡京上りして  
 笥のふし見を春のひと夜かな  
 うかむ瀬四郎右衛門に遊て  
 現に蝶となりて此盃に身を投げむ



夏之部

ほとよぎす二羽啼く雨後の月夜哉  
すくなしと山僧いへり杜鵑

懷舊

牡丹折りし父の怒ぞなつかしき  
簾して厠かくせし牡丹哉  
一もとは散らで夜明けぬけしの花  
愛すべき中にも芥子のひとへ哉  
雨を帯びし若葉に春もきのふ哉  
雨覆の廿日過ぎゆく牡丹かな  
白勝たすくれなる負けず夕ほたん  
西行庵にて

人去てあたら櫻のわか葉哉  
澁柿の花落したる若葉哉  
脱置きし家わすれたる拾哉  
酢莖見て茶漬所望の御醫者哉  
筍やひとり弓射る屋敷守  
そら豆の花散里や伊勢まるり

謝友人

ゆかしさの心とどきぬひと夜鮮  
鮮の蓋とるや晝寢の夢心  
病中とら雄が三回忌を弔ふ  
人の爲に枕しながら夏書哉  
夏籠や小瘡煩ふ御僧たち  
しらぬ字の大きに成りし夏書哉

皐月待つ時宗やたけごころかな

夏草や野武士が持てる馬の數

亡母正當詞書略

首筋の今猶寒し羽ぬけ鳥  
念佛して庵の窓さす燈かな

とら雄一周諱

雨そへて一とせを経さつき哉  
夏草や花有るもののはれなり

重五

さればこそ幟立てたりおもひもの  
風下の黄檗寺や麥ほこり  
蠅を出て物あらそへる翁かな  
蚊やりして師の坊をまつ端居哉

感懷八句

浪速津に庵を求めて五年の  
月日を過しけるにさはる事  
の侍りてやどりをたち出る  
日友どちに申す  
濁江の影ふり埋め五月雨  
久しく召遣へる少女に暇く  
れて  
なかくに忘れじ瓜の漬かけん  
庵の竹を切て筍となす  
竹の子を残してなれも旅のそら  
妻兒が飄泊ことに悲し  
我にあまる罪や妻子を蚊の喰ふ



いほりを出る

長明がやどりさへなし臯月空

行路茫茫然たり

夏草やまくらせむにも蛇嫌ひ

舍もとめるさへ心おかれて

麥の粉をけふは戴くやどり哉

是よりしていづ地に行かむ

と我に問へば我答

萍に乗てわたらむ風次第

右

難波を出る日一本亭の賢息

野外迄送られける其すがた

さへ我にひかれて悲し

晴るれどもさつきの簑の雫哉

たま／＼に團扇もつ日を我身哉

夏川や棹さし得たる人ばかり

さみだれや三線かぢるすまひ取

河狩や甘ハタチあまりの國の守

早乙女やそこかしこ爰そこかしこ

參宮の足引きすつて田植かな

京に遊びて

目ふたいで銚下りにけり兒の親

うそくと旅人ありく納涼哉

夕顔や浴ユキをかくす古すだれ

兵庫に移て

海を出て砂踏む蟹が暑かな

午眠さむれば眞桑よき程に冷えたり

かたはらに童手をきる甜瓜哉

旅人の錢おとしたる清水哉

悪僧の天窓冷せし清水哉

ふたとびす夕立月のうしろより

西吹くや白雨せまる野路の人

此里に醫師やおはす日の盛



秋之部

すどろたつ秋や翁が珠数の音  
華ながら秋となりけり池の蓮

浦邊初秋

浪ひとつ岸打ちこしぬ今朝の秋  
朝東風やほのかに見ゆる秋日和

病少し癒ゆと思ふ初秋

百日の枕洗はむけふの秋  
星合の名所ならばよしの川  
鵲の長柄もかけよほし一夜  
ほし合や詩作る妹がつらがまへ

秋暑

盆過の都はけしきあつさ哉  
涼しさや秋の日南の人通り  
うかれ女の黒髪焦せ散火花  
さればとて濁みも果てぬ木槿哉  
とんほうや聲なきものさわがしく  
蜻蛉や施餓鬼の飯の箸の先  
僧正の榎實こぼすやはつ嵐  
踊子や夕間暮して狂はしき  
兵庫なる鯰にて  
活魚のけふと過ぎけり秋の風  
七尺と荅の説や關角力  
六つに成る子を失ふ人に  
聞てさへ秋の暮むつあはれなり

稻妻の顔ひく窓の美人哉

家在紅塵陌

いなづまや波より出る須磨の闇

夜は相撲晝は踊の噂かな

きのふけふ靈棚にありきりくす

草生ふる小園なし

鱸の膾おもへども任せず

露結ぶ夕あしたのつるべなは

老杜親なし秋風を人の國に住む

出戸澗河流

眼の限り臥行く風の薄かな

秋のあふぎうき世の人に遠さかる

釣瓶にてあたま破れし西瓜かな

かねてひがめる身なれば

正名世をゆづりし賀

蓼喰ふ蟲花に来て遊ぶか遊ばぬか

田も畔も年ある秋を譲りけり

夜座妻子にこたふ

旅人よ何々花の草まくら

うき秋の長物がたり聞く夜哉

女鳩が兒喰ぞめに

老杜が擣衣に倣ふ

よき年の米喰ひそめつ豊の秋

餘所の夜に我夜おくるよ砧哉

秋興八句

一身有止處



ふらついて瓢かたまる軒端哉

國を辭して九年の春都を出

て一とせの秋

われが身に故郷ふたつ秋の暮

田家良夜

夏からの蚊屋はづしけり今日の月

名月や塵打拂ふ摩耶おろし

風たちて月うち曇る門茶哉

衣擣つ女疲れて月は西

追風や夜すがら月の走りぶね

中秋夜半翁に申遣しける

廣澤はいかに敏馬ヒメウマの月清し

朝戸出に露引きおとす鳴子哉

山鳥や茄子花ちる秋の風

出て見よ秋の野守のしたり顔

賑しや蝨飛ぶ屋の秋の昏

草庵小集

端居して主忘るゝ月夜かな

朝風や大名連れてわたる雁

小原野や花喰ふ馬の親子連

宗高（二）に妻射られしかひとつ雁

兵庫草庵背戸の半夜

船毎に蕎麥呼ぶ月の出汐哉

十三夜二句

名月や兎煮た家の豆の出来

入るまでの夜も長月の光哉

（一）宗高は那須與市

家ぬしを大工の譏る夜寒哉

惜秋

起出でて月を尋ねむ秋の果

社頭残月

残月や一夜の松の木の間より

目覺して旅僧坐し居る夜寒哉

雨風の日和をさまる夜寒哉

禁城ちかくやどり求めて病

を守る重陽に

なめて見むかならず菊の御溝水

けふとなりて菊作らむと思

ひけりその翌日より菊つく

りて

おもひ出て菊作りけりことしより

約束の菊見に來りよしの人

落柿や水の上また石のうへ

かつ散て盛まだ來ぬもみぢ哉

雨の鴨一羽もたよ暮れにけり



冬之部

蔓ものの蔓のゆるみや初しぐれ  
初時雨眞晝の道をぬらしけり  
慈悲ぶかき代官たちて初時雨

客中

北陰や冬と成り来るものの音  
はしなしや火箸ゆがみて炭われず

閨怨

夢やぶれ衾破れて君見えす

洛東金福寺の芭蕉庵にして

探題

山畑や麥蒔く人の小わきざし

橋守よ霜掃きおろす誰が爲  
霜に歎ず蟬髭を握りけり  
あさ毎や同じ道来る霜の市

病中京師の客舎に祖翁の祥

忌を勤めて

十月や翁も年をふる佛

梵論が笠吹上げし枯野哉

冬夜

ともし火に氷れる筆を焦しけり  
世の人の數にはもれぬ寒かな  
凧や障子の弓のかへる音

楠公碑

啞々と啼く鳥の聲も寒さかな

眼さませと母のきせたる蒲團哉

病しきりなるころ京師に旅

寝して

初雪ぢや大きな雪ぢや都哉

みやこに田舎にかれに心せ

かれ是に心せかる

我にまた歸る庵あり冬ごもり

語不驚人死不休

横づらの墨も拭はず冬ごもり

年内立春

年のうちに春は來にけり莖の味  
煤掃や思ひがけなき朝月夜  
わがたのむ人皆若し年の暮

(一) 杜甫の句

深草元政上人の寺にて

船中

あら海へ打火こほると寒さ哉  
着心のきのふと過ぎし紙衣哉  
埋火に梁の鼠のいばりかな











冊

冊

冊

難波津や大江の岸近うその家代々礎をかたうして、名もふる國といへる俳士あり。東都雪中庵三世のあるじ蓼太より、ばせを嵐雪正風の遺書をつたへて、風流にも富めるをのこなり。其業遠つ國の雁章を傳へて事とするも、君が代の靜なるためしなるべし。よておのづから其名四方にひろうがり、訪ふ風騷の人も亦おほし。これにちぎる折からの句あり、無下にかい捨てむも本意なしと、一つの冊子をしたよめ、此みちのよしとなくあしとなく書きとどめむとなり、夫がはじめにあらましを序せよと乞ふ。もとよりみじかき蘆のふしの間の才をもて、かゝる初めの筆とらむやといなむべき事ながら、蓼師の需に應ず。將四とせの先にや、かの地に冬ごもりせし契もあれば、咲きにほふ言の葉はすみよしの濱の眞砂とつきせず、岸の姫松のあらむかぎりはと、ねがふことをしかいふ。

安永二年初冬

葆光齋

天府







く行くさくらは梢にはころび、すみれた  
 んほよは堤に咲きみだれ、木の間のうぐ  
 ひすも入江の蛙も、おもふ所みる處風韻  
 あらずといふ事なし。江の中三里浙江の  
 潮をただふと、ばせを翁の詞も思ひいで  
 られ、あたかも仙境に入るかとばかり、  
 やをら筆をとりて案にしづむに、風景に  
 けおされて一句も出ず、とかくして舟は  
 雄島の岸につきぬ。それより瑞巖寺五大  
 堂など名だたる處を見盡して、寺前の何  
 がしが許にやどり、この樓に昇りて見わ  
 たせば、松どものいくとせへたりともし  
 らぬ色なるが、潮にかけをひたして誠に

笑ふが如し。高欄に倚て硯引きよせおも  
 むきをさがすに、日既に西に没し斜影紅  
 をなして、海上又一つの景色を添へり。  
 江の間く、小舟を漕ぎつれ、魚をわかつ  
 聲々またあはれなり。ほどなく晚鐘告げ  
 わたり、もののあいりも見えず、いざ夕  
 ぐれの松しまをと筆はとりたれど、草の  
 うへの露もうかまず、夜もはや更け行か  
 むとおもふにも、又あひがたきこの夜な  
 るにと、うちも眠らで高欄にふとんうち  
 かけ、悠然としてもたれるたり。折ふし  
 廿日餘りの月のさし出たるに、磯うつ浪  
 の月に映じて白妙に、島々の松のいろも

おほつかなきさましたる、墨繪のまつし  
 まともいふべし。これをもとかくにおも  
 ひぬれど、一句のおもむきをも得ず、春  
 の夜のならひとてゆめばかりに明けわ  
 たるよとおほえて、東の方しらみわた  
 り、鳥の聲枝に聞え、朝がすみうちそひ  
 き、海の面靄々としてきのふにかはる風  
 景なり。かくて日のひかり竿ばかりにさ  
 しのほり、霞の衣のほころびたるに島こ  
 そひとつ見えたれ。あはやと思ふうち  
 に、こよかしこあらはれ渡る千島の松の  
 みどりきらしくしく、名工の彫める如く  
 妙手の繪がける如し、心詞も及ばれず。

興に乗じてこの時心頭にうかぶ物あり、  
 うつよなく筆をとれば、  
 朝霧やあとより戀の千松しま  
 と書き終りて、よくく思ふに、是は雪  
 中庵前のごとし行脚せられ、此島にあそび  
 し句也。東都にてものがたりありし頃  
 は、たれもいふべき事ならんと、大概  
 に聞きなし置たるが、このときの實境に  
 催されて心にうかびたるなり。暫くひと  
 り推敲をなすに、朝霧のたちおほひたる  
 が、常ならずと賞して五文字を置き、跡  
 より戀のと艶詞を加へたるおもしろさ、  
 意味深長なる事、古人のほね折りしとこ



ろ、みなかくこそあらめ、我も人も同じ  
 事いふとのみおほえ居たるが恥かしさ。  
 はじめて我及ばざるを知りたるも、此松  
 島一見の徳により、かゝる絶妙の境をさ  
 ぐり得たるも、外ならぬ因縁にやと、こ  
 のとき胸裏に雪中を師と尊びて我をし  
 りたるは、あつばれの大悟ならむと自得  
 し、江戸にかへりて雪中庵主にこの事を  
 さんけす。師しめして曰く、よししく、  
 夫こそ我家の理窟をはなれたる一路向  
 上の風流なるをや、世塵得失を忘れて月  
 下推敲の句を點頭すべしとぞ。夫よりこ  
 のかた花にうかれ月にあくがれ、雪に寒

き日も蕉門の意をさぐるに、仰けば彌高  
 し。去ども老若貴賤のわいだめなく、老  
 後のたのしみといふ教なれば、こゝろを  
 遊ばしむるにたれり。猶行くすゑの修行  
 むなしからずば、下手の數にも入りな  
 む、そは生涯の本懐このみちの冥加なら  
 むかし。

明和七年庚寅冬十月十二日

浪華荒陵山下於蕉翁牌前

回心齋舊國謹誌

(一) 東海源氏國の祈落

元日やこの時人壽二萬歳  
 元日やうぐひすも鳴かでしづかなり  
 老の春めがねに蒔繪かよせばや  
 元日のおそび所をさがせば  
 新町の元日やこれ姫のくに  
 うまれしむかしの曆にかへ  
 れと南州のことぶき猶たの  
 みあり  
 百までには三十九年はなの春  
 樂其樂利其利  
 唯起きてかん祝ひけりわれが春

霞みけりはやかみの町しもの丁  
 とし喰ふ鬼の行くへやはつ霞  
 いつはともあれはつ烏く  
 まさ夢や浪花は梅のはなの春  
 武州鬼石福田氏八十賀  
 ふくわらや奥ある米のはひり口  
 元日や二日とかよる夕まぐれ  
 ひとの心をたねとして萬の  
 ことのはとぞなれりけると  
 は我生艸の道にも尊し  
 なにはづのはるや二日は淺香山  
 門松は王母に戀の染木哉  
 見あるかむいざ門々の松の月



かど松やかどみのおやに物申す

有感

つながるゝ三尺の世やさるまはし  
さる引の友にあひたり宇津の山

住吉奉納良能勸進

しら鷺のかすみこほすや松の陰  
なゝ草やおやの拍子にかしこまり  
七草に不二の山彦うたふなり

楓橋夜泊畫

とだえては船に聞ゆるなづなかな  
雨がちに雪ふる朝やわかなつみ  
さむき方に立て若菜の御供哉  
袂ふく若菜がすゑや小まつ川

鶯かへて腹立させむ妙しろ女

一 其角つねに申されしは

好氣根稽古の三つにくらぶれば

すきこそものの上手なりけれ

將棊の師大橋宗桂もつねこの歌を  
誦し申されし

ほろうちて散らすな花のきじ隠し

すみだ川にて

櫓聲浪をうつて妹がるは誰ぞ朧夜に

古畫に

かゆ杖や馬の内侍をしととうつ

一 股大根の畫

此大根人には見せそはつねの日

屈原畫

梅ひとり咲きぬこと木はまだ寒し  
時人に詔はず梅さきにけり

武州兒玉郡春貞寺といへる

に梅あり花五色にしてめづ  
らし

花さらば又いつ色の梅の庭  
香を持て梅の林に入る夜かな  
ちる梅や獺のかづきし魚のうへ

ひらの町神明境内出世天神

は松木家より奉納ありし神

體なり

さくや此花みむ松の木の間より

(一)木男は木強男子の  
意なるべし

たえず匂ふ梅又もとの香にあらす

(二)梅咲て木をとこがちの花見かな

後朝

我袖のわが袖ならず梅の花

一支考曰、俳諧はたゞ梅の花のやうに  
有るべし、此花のかたちは世にへつらは

ず、たゞ有のまゝに咲きいでて殊勝のも  
のなり、しかるにあやなきやみの夜すが  
らにも、たゞ獨りにほひるたる、雪の裏

はさらなり、花の佳名を世にもとめぬ  
は、俳諧の人のためにして、名を急ぐま

じきたとへにてあるべく候、さればとて  
侘びはてゝ世をするすみなるもにくき



物なるが、深き時は暗香の月にうかび、  
あさきときは疎影の水に横たふ、風流な  
らざれば俗におちやすし、さびしからざ  
れば酒色にまどふ、あるひは寒くあるひ  
はあたゝかに、世に殊に自在のものに  
て、これらを法師がよのつねの工夫にい  
たすにて候へ

鉦さけて出たりな梅の亭主ぶり  
おもひ切て梅見に出でむ日こそなき

几董が夜半亭になりし賀

一條院の御時花有喜色とい

ふ心を人々につかうまつり

しに、刑部卿範兼 君が世

にあへるはたれもうれしき

に花は色にも出にけるかな

と詠給ひしも、かゝる折か

らの壽におもひあはせて

はるの夜も半になりぬ梅がやど

散りしほや香もそどろけに梅の花

主家のつとめ功なりて國に

かへり申さるゝ信濃の人に

おとらめや陶朱買臣うめの笠

梅ひと日ひと日かゝゆる餘寒かな

下もえや忘れて過ぎしかきつばた

木曾深阪といへる所にて

下もえてあへもの富める山家かな

春庭曲

梅柳出あひも上手同士なり

一 洛の諸九松島行脚の折の添へちか

らにとて、案内のために遣しける元二郎

といへるあらおやぢの、七十五歳になり

たるが、風景のおもしろさにめでてや有

りけむ

いのちこそたからの山の松島や

かく不風流のものだにも、時に感じて自

然とうかびしものなり、又みちのくにの

二本松に俳諧すけるもの共、さくらがも

とに酒くみかはしあそび居ける中へ、所

の百姓のいでて酒のませ給へと乞ふ、發

句いたし申されなばいかにもとたはれ

しに、この人しばし案じて

きのふより翌よりけふのさくら哉

いひ出されて興さめ、人々ほ句も出ざり

けり

うつかりと名所の中に田打かな

母やまたむ我うつ畠のおほき事

川島もはたけ打つなり淀かつら

いて解や木幡の里のかり足駄

齒ごころの又冴えかへるなます哉

雪消えて遠山松となりにけり

和州檜原玄賓庵主勸進七十

賀 松延齡友といふ事を



松につれてあるじにつれて松の花

伊豫の國朝倉の庄官かたに

今治の太守の名を給ひし青

三位といへる松に

蔭深ししひもひろはで松の花

覺英僧都舊跡みちのくくづ

の松ばら 六百五十年忌

松にこそ葛のむかしを呼子どり

上毛にて

莖立やたのの酒やのひたしもの

ひとつ呑でうす紅梅や薺トコロうり

おとろへやむらさき匂ふ露のたう

一 おにつら日、未熟の人の俳諧は春雨

のと五文字をいひ出でし時、はるさめ先

に出候といへば、秋さめのとつけかへ侍

らむといふこそうたてけれ、春の月はく

れ初るよりおほろだちて物たらぬけし

き、夏の月は灯をとほく置てながめ深

し、秋の月は窓に軒に海に川に野に山に

ながめあり、冬の月はひとむらの雲の雨

こほし行くひまを照らしていそがし

はるの雨は物こもりてさびし、夕だちは

氣はれて涼し、秋のあめはあはれにてさ

びし、冬のあめはそこよりさびし

うぐひすはきく、郭公は待ち侘るこそ詮

なるべけれ、四季折々の草木ひとつづ

譯ふべし

はるさめや舎りがてらの年八卦

地にあらば連木すり鉢猫の戀

あかつきや猫の戀するはつせ山

戀ひくゝて猫のおなか腹中やはるの月

おもひかねて猫はなちやる雨衣かな

はりまや九兵衛三回

北はまの獨尊ともいはれし

人なれば

今は三とせほさつの中の涅槃哉

しらうをに有明月のうるみかな

白魚やこの傳奏はなにの君

父をうしなへる人に

霞む日や残せしめがね見れば猶

かすませも果てず江戸ばし日本橋

三條や霞ひとへに人ひと

帆ばしらに霞の袋脱したり

内田活丈子がたへのほり

申さるゝに我は先だちての

ほりし折

すみよしに松こそ笑ふ山かつら

きさらぎや手もおほゆる莖の水

おほろ夜を見つけ出したたり隅田川

述懐

おほろ夜や我もむかしの男ぶり

朧夜や越路にかへる鏡磨

(一)地にちちば連理の枝の洒落



(一)古今七、白女命だ  
に心に叶ふものならば  
何か別れの悲しからま  
し

几十子の國にかへり給ふを  
おくるに、なにか別れのか  
なしかるらむとは、大江の  
白女が命をかこちしことの  
はながら左にあらで  
かならずよ似た春の來てかたるべし  
いとゆふや南に向ふ東大寺  
かけろふやたちも及ばぬ不二の裾  
あしたにはかけろふ立ちぬ鳥邊山  
花頂山にて  
かけろふや僧の答ふる小鍛冶が井  
陽炎や荷鞍ほしたるはし驛  
たがために酔味増待つらむ春の草

長閑さや簀にはじかるよ海苔の音  
信州上諏訪自得所持ばせを  
翁より傳來のうぐひすの水  
滴に人々の句を乞はれける  
にし  
おし親のうつはや道の月日ほし  
うぐひすの旭むかへて初音かな  
うぐひすの巡るや軒の芋俵  
金色鳥や鉦つかはぬ家のさま  
鶯の初音やちさく打ちかへし  
きぬぐにうぐひす啼てうとまれず  
まだ寒し畠うつりして鳴くひばり  
我畑に雲雀舞はせて日は入りぬ

(一)暹昭「蓮葉の濁り  
にしまぬ心もて何かは  
露を玉とあざむく」

樂人町にて  
破を舞うて急に落るか揚雲雀  
落ちしほの月をおくるや蜩とり  
すみよしや粉濱の蜩赤味噲に  
生のりや江戸の南の小むらさき  
西の京西大寺など見巡りて  
暹昭がうたをおもふ  
柳にも誠少しつゆの玉  
きのふ今日あすの柳のみどり見む  
章臺  
見盡してかどみにうつす柳かな  
老情  
春やむかし出口の柳みてかへる

青柳やおもへば長き露のみち  
なか／＼に柳のあるじはる易し  
大筒の玉にもぬける柳かな  
女あふぎをひろひし人に  
落ちにきや女のこしの柳より  
江戸兩國逍遙  
漁舟みえて吹くなり春の風  
しのぶ夜のしら玉椿散りにけり  
鶴舞うて椿屬々ちる日かな  
夜半亭蕪村を悼む  
この叟の潔き性質を思ひて  
落ちるときおちし椿の一期かな  
老少不定の心を



落つばきうつろふ花は枝にあり

靈山丸山あるは花頂の風聲

水音みな此會式の興を添ふるなるべし

糸竹の花の雲間や墨直し

うどの香や詞少のをとこ文字

遠州高遠の志むら氏筆道の

ほまれ有しが、二月二十五

日故人の數に入り申されし

を聞て

西行のもちより二十五日哉

夕がすみどれが女のふまぬ山

やぶ入りの二日になりし夕日哉

對客

我はせきあへずも山葵たよきしを

一 活々坊の云、一座の宗匠は軍中の大

將軍、商家の番頭などの心せちにして、

一座作にはこるときはしづめ、一席しづ

かならば又引きたてよ句をなすべし、ひ

とよせ初午奉納の畫馬連衆作に作をあ

らそひし跡へ樓川が

初午やゆらりくくと人通り

かくいひいでしかば、かくべつきらびや

かに出來ばえせし、是死活のあしらひ

なり、此一句ばかり聞たる人の、何事も

なき句なりなど評したらむ、物その場の

なのはなや鬼の諷ひし門の跡

尾崎氏江戸下りに

四方は花阿邊川もちに江戸女郎

三尺の松みどり也やけのはら

眠さめてひとよき春の夕日かな

はるの日の風ものほらす夕ぐれぬ

鯛買うて海女と酒くむ春日哉

ぬれ鶴やすぐろの薄わけて行く

畫圖

紅梅に兒の唐輪のそこねけり

一 蓮二日、誹諧はたど物の本情にまか

せて、木のよろしきに遊ふなり、古式に

つながれ其粕をねぶるまじき也、たとへ

(一)朱雀門の鬼都良香の詩句をつぎたりといふ故事

差略あり、これを思へば發句はがりいひつたへて、いにしへ人の句を評せむは、なほつたなき事ならむかし

はつ午や有りともしらぬ古社

はつ午や戸に拍子とるめくら兒

はつうまや新別當の青あたま

二月堂

水取や井をうち回る僧の息

苗代に筑波のこのもうつるなり

なはしろや昨日は草の水がくれ

苗代や小蛇のわたる夕日かけ

君が代や米喰はうとてわらびうり

たんほよや野をめぐり來る水の隈

(二)木は時の誤か



(一)高野六十那智七十の諺に據る  
(二)後拾遺十、伊勢別れに其日はかりはめぐりきていきも歸らぬ人ぞ戀しき

ば八卦には離坤兌乾坎艮震巽とあるを、易には乾兌離震巽坎艮坤といへば、おなじ文字にてはしる也、走てよきもあしきも、其時にのぞみての事なるべし、古人の格式は初心の人のため、中品已上の俳諧は、われしりて我するなれば、一字一點の學文も入るべからず、學文は階子也、はやくのほりていらぬとはしるべし、下品のうちはしり過ぎて階子ふみはづしたらむもあやふし  
紅梅に日本ばれの天氣かな  
紅梅はさめて彼岸の夕日かな  
鶯の輪の下に鉦うつ彼岸かな

伊勢山田ある寺に秋葉山勸請のやしろありかたへなる  
ひと木に  
三尺の接穂も梅のにほひかな  
ひがし白にし紅梅につぎほかな  
物さはる夢のみ見する接穂かな  
關口七郎左衛門風士が七十賀  
猶花にちぎらむ那智の若衆ぶり  
亡妻三周の追悼  
別れにし其日はかりは回り  
きてと、いせの大輔がふる  
事も

にた花の物いはぬ目ぞ恨なる

上毛清水寺奉納

花さくや御まなじりの届くまで

雪中庵七十の賀

老師が古稀の祝に我も二つ

ちがひの老弟といはむもを

かし

たえず見むかたみに花のかどみ山

攝州溝杭矢島氏へ八十賀

山口や花の千もとの八十瀬川

かはらけに味噌も置れぬつばめ哉

つばくらや其子もかゝる思ひせむ

家分けてつばくら待たむ棚つらむ

河州岸田堂

かけくるや其梁のつばくらめ

一古き歌を折よく誦しいでたらむは、

あらたによめるよりも風情ありとや、淀

のわたりのほととぎす、宗盛の宇佐の奉

納など、手がらありてきこゆと承る、ち

か頃尾張の人のつまの七とせまで腰た

たでありしが、つひに身まかりしとき、

其夫のおもひいでて申す

麥くひし雁と思へどわかれかな

野水が句をつぶやきしはいとあはれに

して、野水が作せるよりも情あつかりけ

ると、鳴海の蝶羅ものがたり也



(一) 染木は錦木のこと

行く雁や北斗の外は雲の浪  
つまなしや一羽たち行く雨の雁  
かへる雁紀の路や花のほころびし  
衣擽てばかへり來よ雁かへり來よ  
雁風呂にうちくべられし染木哉  
大旦那となりけり春の雨やどり  
鳥の巢や小僧にしめす事ひとつ  
莊子の畫  
其鼻に入れて眼覺せ蝶のゆめ  
蝶々もしろきに事は足りぬべし  
雫して羽叩く雨の胡蝶かな  
たちいでて初蝶見たり朱雀門  
世を世とも三月がほの胡蝶かな

莖立に翌飛ぶ蝶のすがりけり  
蝶の髭立ふるまひにかくしけり  
なる神の撃つぞや胡蝶舞出でよ  
みよし野の吉野のおくや蜂の聲  
にしき木に蜂の巢ありと申しけり  
山里  
雪解や今更木々の下紅葉  
雪解や谷の戸いづる檜もの  
片隅に蹴のひかりやはるの雨  
高雄山にて  
はつ戀や袈裟も紅葉も青きより  
一 鳥醉曰、ばせを翁古池の吟世上にい  
ろいろと解をなす、恐らく翁の心にあら

(一) 且風は談林風

じ、其頃尾城の四五子やと正風にもとづ  
ける折なれば、ひとしほ易きかたに骨髓  
をつくし、衆にしめすの五文字ならむ、  
其角が山吹やと申せしはおもしろけれ  
ど、衆口もとの且風にかへらむ事をなけ  
き、山吹の花なる汝にはよからむ、我は  
かくこそと御申ありし、句上の事はさも  
あれ、みちに志のあつき事をおもふべし  
と  
清女が御簾をかよけし晝に  
猶みたし花の夕べの月のかほ  
ねむき日や水を離れてなく蛙  
思ひ出や蛙一匹御溝水

(二) 芭蕉「猶見たし花  
にあけゆく神の顔」

ふり出して眠しづまる蛙かな  
ある諸侯の御やかたにて  
ほり池や御領の蛙るてまるる  
信立の團扇ゆらくかはづかな  
千町田に聲あはせけり井の蛙  
雨の蛙あるはつま戀ふ夜もあらむ  
有感  
青からば憂きには泣かじあか蛙  
星かけに田にし鳴くなり豊浦寺  
龍にかしてあと濁さるゝ田にし哉  
革足袋のもえいづる春にあひにけり  
其中の一つは落ちよいかのほり  
いかのほりどちらへ落ちむ安藝黒田



物洗ふ側へ落ちけりいかのほり

庄田腸音を悼む

いときれて風のゆくへや西の空

越後の國にありといふなる

むら消えし雪のまにくる簾かけ

出かはりの人ひと月はおにもなし

でかはりの井戸には浅きちぎりかな

南京行

子をおもふ闇はあやなしたよき鹿

鹿の角おほつかなくも拾ひけり

上巳

ひなの膳揚名の金太郎あらしけり

白桃の苔にひなの顔かよむ

おもかけの皮子を出ぬ古雛

飛驒の山中に

六十の息子もちけりもよの花

桃わけて来たたぞや伽羅の油うり

咲初めて桃なき里はなかりけり

桃さくや跡目披露の片山家

狐去て桃林しばし春を笑む

東方朔山岡頭巾をかぶりて

桃をぬすむ晝に

此もよや年の眞砂は盡るとも

叔父前田良阿君を悼む

はるの夜の片破月も入りにけり

はるの夜や伏見あたりの片はたご

墨江に落日を見る

人去て三日の夕浪しづかなり

蟹とりて甲に物かくしほひかな

和歌の浦にて

瀉は干て便なき蟹のはさみ哉

ながき日やけさ追ひやりし黒き蝶

永き日やまだ中山の八から鉦

寺もちし初や花の亭主ぶり

くよられぬ豆腐も来たり花の頃

世は花になるとも知らず奥吉野

ありもせよひと夜は花にいなびかり

花を分て花さきにけりよしの山

江戸酒にいたみの衆の花見かな

花に下戸あはぬ敵とは無念なり

花に世をとりて七日の上戸かな

白麻五千句に

さくやこの五度はなのよしの山

あらし山の花みむとたれか

れ訪ひ、野の宮天龍寺など

見めぐりしに、臨川寺のあ

たりより雨しきりにふりし

かば

花とちるは雲なり雨のあらし山

落貝の提重遅きはなみかな

仁和寺にて

花を踏で蛇のうへ行く人の聲



はなの山伽羅ぬす人をみつけたり

歸 阪

京の花見ゆめにもあらずぶとの跡

花みぬ人唯ちるまでの名なりけり

ちりくゝて花の氣違しづまりぬ

老はたぞ涙おとして花にたつ

一 船留て陸はさくらの花車 西鶴

此第三の事、後水尾院様より御たづね被

下候に、宗因が申しつるが、留て候へば

とまりも可仕と御答申上し、其年柄人が

らにもよるべし

初ざくら田舎の人が見て仕舞ひ

油断して二番ざくらの花見かな

手をうたば散りもやすらむ初櫻

うぐひすの白き眼やはつざくら

山 家

白簪に蕨のあくやはつざくら

客ぶりはさくらにあるを蕨汁

曉に雨の降たるさくら哉

月は雪はおしなべて櫻ながめけり

上毛烏渥先生八十賀

さくら咲く遠山も何君が杖

世にうむや十日過ぎたるさくら守

豊竹越前司馬の叟八十の賀

しけるとき

わかや和歌ならば人丸さくらかな

もる神の廿日も過ぎぬ朝ざくら

一 活々坊いへるは、沾徳の詞に俳の魔

心といふは、人の師にならむとおもふ故

なり、此疾にて修行半途なり、いつまで

も人の弟子たらむとおもふべし、弟子に

なりて終るべからずと云々、雪中庵もつ

ねづね此事をいひて、御互にいつまでも

稽古あれかしと思ふなりと申されし

海棠やかたけて過る日本ばし

かいだうの花さきにけり永き日に

吉野出て又おもしろし三月菜

奥州二本松西立坊といへる

僧、錢箱といふものの妙音

を聞て申す、いかに伯雅の

三位なりとも、この笛に油

断すべからず

葉二つの笛にもかへそおほろ月

鮑むくいせの浦人はる深し

花咲て人にはうとき大根かな

はる三つきおもへば我もあふむ石

一日は不二見ぬ山や赤つよじ

一 雪中庵にて夜話の節、門人山幸申し

けるは、其角五元集の中に、しまむろに

茶を申すこそしぐれ哉といへる句、いか

なる事にやとたづねけるに、蓼太の曰、

此事先師吏登物がたりに聞きしは、むか



し初代一蝶 其角と相よし、然るに蝶故  
 ありて公の罪をかうむり、伊豆の島に流  
 さるとに、友人これかれ別れをしみ、  
 舟場までおくりて、信友の情をなす、一  
 蝶申しけるは、かゝる身のふたよび相見  
 む事かたし、是までの御懇情いつの世に  
 かは忘れ申さむ、我が島の事を聞く  
 に、大かたの人魚をとり日にほし乾かし  
 て、江戸の便に鬻くと承る、我も又さこ  
 そあらめ、然ばうをの腮に木の葉やうの  
 物を、すこしづつ入れおくべし、若さや  
 うのものの入たるほし魚あらば、蝶がな  
 せるものよと思ひたまへかといひて

別れたり、人々其舟かけの見ゆるまで見  
 おくり、其角はいとどむねふたがりて立  
 ちも去らでありし、其後ひとよせばかり  
 ありて、其角が僕日本ばしの魚の店に  
 て、乾魚の有りしをとよのへかへり、か  
 てぐさになさむと、たわよなる魚を火に  
 あぶりけるに、むろといへるひうの中  
 に、さよの葉のやうの何とも知れがたき  
 が一枚出たり、のこる魚どもにも各おな  
 じやうにありし故、扱々島のやつらは、  
 をかきし事をなす也と笑ふを、其角ふと  
 寢耳に入り、やをら起きあがり、蝶がい  
 ひし事を思ひ出し、此乾魚はいづかたの

島よりまるりしものかと、其ひさける間  
 屋へ人はしらせてたづねけるに、大かた  
 は八丈大島よりわたし申すよしを申す、  
 角こゝに於て蝶がいひし詞を思ひ、朋友  
 の情しきりにうごき、蝶がしたしかりし  
 友どちをあつめ、茶を申入れ、此干うを  
 を出し、これこそ蝶が申しのこせしかた  
 みなれ、いまだながらへてかゝるわざを  
 なしけるよと、みなくそなたのかたに  
 向て、はるかに信友の情、今更涙とどめ  
 かねたりしとぞ、角が句もこのときの事  
 なりと、師のものがたり有りしとぞ申さ  
 れし

いなさ吹く彌生の末や大がつを  
 むさしのにて  
 なしの花有りといふなる逃水は  
 ちるなしを花のみぞれと申さばや  
 けばく、と旭さしけり梨の花  
 なし咲ける夜をしるがねに價せむ  
 仙臺つよじが岡にて  
 木瓜さくや此玉川はむつの外  
 菊植る叟や秋にあはむとす  
 都へは人して菊の分根かな  
 春さびし露の古葉に夜のあめ  
 嘴太も子に泣く雨の夕かな  
 いざ竹の秋風聞かむ相國寺



谷の藤泥に尾を曳く風情あり

ちぬの浦

行くはるや堺のうらのさくら鯛

うり聲はとほ山どりかさくら鯛

上毛の國に侍りて

桑子もりつけの小櫛の落ちかより

夜の守護ひるの守や蠶棚

衣川蠶の蝶のながれけり

月もはるの朧に細きかぎりかな

玉東江戸下りに申遣す

みつけ番にしかられな、う

す雲高尾に長じりすな

行く春や江戸は牡丹に杜若

ゆく春のしころは切れて遅ざくら

ゆく春も銀杏の花のひとよかな

行く春や鱈にうつろふ鯛の味

春かへれくと深山ざくらかな

もろこしまでも行くものは

石火矢に船出す春の行くへ哉

中といふ字をかよせて家の

政事をつよしみ給ふ御方へ

はるの日や有りのまとなる牛の影

晩春曲

この月にほととぎす鳴け花の雪

向ひ同士物いふ夏のはじめかな

琴の春三線の夏となりけらし

一 鳥酔日、附句は次の句ぬしのために

よろしきやうにと心がくべし、鞠のあし

らひ成べし、猶さしあひ去嫌の多きもの

あり、たとへばかのおふみの筑間祭など

いふ季は夏にして神祇なり、戀なり、名

所なり、所名なり、句に依ては人倫おも

かけなどのさしあひ有り、むざと遣ふま

じき季なりと申されしか

汗ふきやつくまの鍋の二つより

花去て鳥まつ簾の青みかな

十南齋はじめの叟一日一萬

朔日とたしかに申せはつ給

さくら狩家にかへれば給かな

なにとなう夫婦みかへる給かな

どこやらに女さびしき給かな

夫さきのふは紅にさかりをみせ

白し園生の櫻の空しく散て、

けふや卯の花の白きにかは

る世のはかなさを思ひやり

して、林氏のもとへ申遣す

花のいろにそめし袂をはつ給

衣がへはよきとる氣になりにつけり

こよろまで酔にあふ日なり衣がへ



三千のほ句を吐て、俳道の  
和左大八なりと世に鳴りし  
も、光陰のつるおと早く、二

十五年に成りぬる事よと、

今の主まで懐舊を述侍る

發句を射し名の通矢も九千日

白緑ハクリヨクのうら吹きかへるわかばかな

大太刀の御朱印もちし若葉かな

鳥醉居士十三回

この翁なにはにたびねして

おはしける事などおもひい

でて、烏明百明の二隻に申

しおくる

葉になりて残るさくらや壬生山家

花丹の功ますく江林墨水

に名をなし給へと、にしむ

ら氏が新宅に

しけれく若葉の花の宿ばひり

はこね山にて

夏木立伊豆の海づら見えぬなり

卯のはなや曉の風月をふく

ひとよせの天地易き四月かな

大かたのみどりを盡すうづきかな

もえぎ地のあやおり亂す卯月哉

一 支考曰、月雪花ほとよぎすは、君に

もあらず父にもあらず、我らが爲のなぐ

閑寓

さみものなり、くそともいひ、味噌とも  
いひ、人參附子ともあがめて、四季に心  
やすき出入のものともいふべし、擧てよ  
き時はほめ、をかしき時はそしりてもあ  
そぶべし、心にとどめざれば氣一物の人  
なりとて、月花もはらたてぬもの也

龍花會

灌佛や五段がへりもなさるべく

木といふ題にて

庭更に木缺の音かすかなり

こがねある塚とこそ聞け桐の花

春過ぎてはや咲くみかんかうじかな

香久山の花や見捨てと晒うり

たちばなや碁盤かよへて下手ふたり  
橘やならの都のふる手かひ  
この殿に人しづめたる牡丹かな  
切つて遣るあとの明たる牡丹かな  
巳の刻のかねを牡丹の花の時

漢相國蕭何畫

無事にして芍薬の花ちりにけり

芍薬やおくに藏ある淨土寺

一 ばせを行脚の文中に、女性の俳士に

したしむべからず、師にも弟子にもいら

ぬものなり、此みちに親炙せば人をもて

傳ふべし、流蕩すれば人敬ふべからず、



此みちは專一無適にして成す、よくおのれを省るべし

芍薬のちるや落るやいつの間に

芍薬や末の十日の雨に落つ

千兩のかくし妻ありかきつばた

杜若凡そのこさぬ水のいろ

其色の一つに富めりかきつばた

からうじて芥子の使の市を出る

愛女をうしなへる人に

芥子ちりぬよしや牡丹も廿日草

幟を立てはじめし祝に

紙子着む音たのもしきのほりかな

芥子咲て抑雨とふり風とふき

有所思

白芥子のおのれを知るか花ひとへ

白髪と吹かるよけしの主かな

咲くときや淺間に向ふけしの花

さきつめて莖みじかけの葵かな

上毛小林里旭が父を悼む

老松の千代を譲りておちばかな

そらまめやしら路に花のこむらさき

妙観が刀花袖に用ひむや

竹の子も切盡しけり明智風呂

若竹や月の細りも二十四五

一蓼太日、都て人の句を聞くに、其場

其人貴賤老若にかけて、景曲観相のうへ

(一)妙観は寶龜十一年攝津勝尾寺の觀音及び四天王を彫刻せし沙門  
(二)明智光秀敗北の時黄金を京都妙心寺に寄せ追福を乞ふ、寺僧之を以て毎年六月十四日風呂を焚き諸人を入浴せしむ

閑居

花落る江によし雀のはつね哉

よしきりの鳴止むかたや筑波山

よしきりのよし一株に高音かな

蜘蛛の糸つくるふ雨のはれ間かな

やぶれけり袋の蜘蛛の親しらす

金春なにかしかたにて

僧脇の月は出にけりほとよぎす

ほとよぎすくより枕の茶も匂ふ

綿鞠の膝に落ちけりほとよぎす

紅の舌一枚やほとよぎす

ほとよぎす月の暈着の連歌哉

すみよしにて

を以て辯ぜずば、あらはに口をひらくま

じき事にこそ、新古の沙汰に及ばむもお

なじ、たゞ人の句を聞て其まよ成ほどと

早速に感じたらむは、其人の俳諧しられ

てはづかし

麥秋やよしのの奥にこもるとも

加藤二にめし喰せけりむぎの秋

島田驛桃舟にて

苗に其たびねなつかし手作麥

かつらきの神わざなれや麥の秋

麥秋や嵯峨もさがにはしておかず

宇治殿の障子立てけり麥のあき

おのれさへ時ある蚤の四月かな

(一)宇治殿は隆國をいふ



遠里小野の油なめたかほとよぎす  
はからずよ向さまなるほとよぎす  
ほとよぎすぬけ出しあとや三日の月

三井寺にて

寺といへば初音といへばほとよぎす

東都の往返五十度に及ぶ

百不二や月雪花にほとよぎす  
東山嵯峨は見ぬ戀ほとよぎす

一 吏登翁の云、世にはらみ句といへる  
あり、趣向うかびながらも、句を惜て其  
場をまつ、今の世の懐劍辨當などといへ  
るさもしき心とは、おなじ日にかたるべ  
からず、むかし源の順が、楊貴妃歸唐帝

思、李婦人去漢皇情、かねてたしなみ侍  
りしが、對雨窓月といふ題を得て、この  
句を出せし、津守の國基がうす墨にか  
く玉づさと見ゆる哉のうたもおなじ、

ふし柴の加賀、白川の能因なども皆この  
たぐひなり、ばせをの翁も、うき世の果  
はみな小町なりといふ句を、ひさしく心  
にかけて、品かはりたる戀をしてといふ  
に出せり

四火既にもぐさ盡きけりほとよぎす

かまくらつるが岡にて

なけよやよ百萬たよけ郭公

三所權現にまうでし頃

きよそめて二百町坂やほとよぎす

ほとよぎす喰てはこして六月なり

一 雪中菴云、一座の連衆をかうがへ  
て、むざとさしあひの句をなすべから  
ず、むかしばせを翁の杉風が耳のうとき  
をあはれみて、つんほの句をせられずと  
かや、是一座のさしあひくり也

川ほねや申刻さがりの使者男  
月もたぬ露こそなけれ苔のはな  
物おもひ苔のはつ花みる日かな  
かんこどり狩や都の腹ふくれ  
千觀が馬洗ふなりかんこどり  
よしきりの岸うち過ぎぬ閑古鳥

(一)其角「千觀の馬も  
せはしや年の暮」

かんこどり江戸を去る事八百里

流羽を悼む

音をいれし末の十日やうぐひすも  
一 嵐雪日、句を吟するにあまりては口  
惜しとて、ひたもの都にのほり、後には  
少しも訛らで、執筆へ句を渡されしとや  
花の京かまくらの夏はつ 鯉  
水かけてかつを一世のきほひかな  
南鐮の箔のしろみや初がつを  
をちかへる八百町や小鱈うり

粟津奉扇會

腰にあるうちは不易のあふぎかな  
維光が蜘蛛捨てにたつ扇かな



廿年女あるじのうちはかな

山中

麻生てゆがまぬ家はなかりけり  
乞食の世にある夏とみゆるかな  
朝風や魚の血こほすみさごの巢  
紅うらの袂こほると野びるかな  
夕すゞみ地藏こかして逃けにけり

左専道友三寺

禮まるり各涼し伽留羅烟も  
子子や方四五寸の和田のはら  
子子に水そよぎけり寺参り  
明方や鳴く音血を吐く蚊の歩み  
伊藤なにがし轉役加増の賀

めでたき事のかさねさせ給

ふ方へ

御庭までも皮脱ぐ竹のきはひかな  
蚤夜毎不二の五文字の狂ひけり  
江戸みぬは男にあらじ閑古どり  
紫蘇島や雨の蹴上のうすぐもり  
一 其角云、さしあひくりといはれむよ  
り、まづ句しといはれよとは尤の事な  
り、句しと成てはさしあひは自由なるべ  
し、たとへば非常のとき鳴物音曲今日よ  
り御免とある、早々まちかねて出さむは  
よからじ、一兩日もさしおきて扱可なら  
む、句しは此處につまらで外のものを作

せむ、さしあひくりは六句めづつに松の  
句を出さめ

三界無安といへる心を

立山の人京に寝て蚊のぢごく  
拂ふ手にはかなや蠅の雨やどり  
うきゆめのあるとき嬉し蠅の聲  
高安の戀はさもあれ飯のはへ  
蠅うちや上手になりし我こよろ  
扱こりよ餘り葉末のかたつぶり

此句は位のほれる人のす

さめられし事によせて申

侍りし

かたつぶり這合せたりつのだ師

事ざまやめでたき雨のかたつぶり

雨の日や日の岡のほるかたつぶり  
裸子の夕がほさしてかくれけり  
手にふるゝ團のかけや水の月  
萱のたう雨のけあけのかひくし  
夕立やおくれし雨に日のうつり  
許六のほとよぎすに對す

ひとしほやさ浪くどりし鱧の味  
月の夜はおのれを遊ぶほたるかな  
ちやうちんにあたりて黒き螢かな  
夕風やほたるの中の洗ひ馬

一 淡々曰、詩は長刀、和歌は刀、連歌は  
わきざし、俳諧は懐劍也、こころ切にお



もひつむれば、其利事はやく始皇の胸先  
をさすにいたる、刃長くば其所にいたり  
がたからむか、むかし戀といふ題を賜は  
り

夏瘦と問はれて袖の涙かな  
といひけむも、即懐劍のきれ味なり  
なつやせや西日さしこむ竹格子  
むらさめや灰の落ちつく藍畠  
小さめふる空やむくけの朝ほらけ  
さゆり葉やむらさめ過る蛇の聲  
水仙の根をほす軒のあつさ哉  
日ざかりをしづかに麻の匂ひかな  
しのぶ戀といふ事を

吉田屋の蚊に喰れけり伊左衛門  
一 長嘯子の云、はじめて物を誦しよみ  
かぬるは、夏中人の家に入てしばしあれ  
ば、その物かの物とわかるが如しと  
かたびらやなべて世にある人のさま  
かたびらやさもなき人の折目高  
かはほりやせめても苔の花に鳥  
宇治にて  
かはほりや大黒彫む板間より  
譲られてけふはつ舟のうがひかな  
その外の罪はつくらぬ鶉飼かな  
月入て鶉川に高し老が聲  
月みせて船に子を守るうがひかな

麻生庵野坡三十三回

無名庵にて風律興行

塚に生ふ葱もゆかし杖のあと  
さらでだに乳母かしましき粽かな  
歌によまれ湯にたかれたるあやめ哉  
五月五日加茂にて

東武馬光卅三回石漱興行

ありし世のその墨の香や入梅じめり  
降る事にみなしておりぬ五月あめ  
どの雲のふるとも見えす五月雨  
春麗園蝶羅ぬし五十の宴催  
されしも、まだ四とせのほ

(一)「おりの」は「居りぬ」の意か

どぞかし、あはれ七の叟の  
むしろがみにもとちぎりし  
も、今は空ごととなりぬと  
て、龜章山父のもとへ申遣  
る

百とせも半鳴海やさつきあめ  
一 吏登の云、我句を人に聞かしめ、き  
こえがたく云ふものあらば、よせ直すべ  
し、口論のいつも我に理あるがごとし、  
樂天が老婆に問ひしも、この事なりと申  
されし  
二つめの清水に足をひやしけり  
呑んでから宮守のみゆる清水哉



媒のほめのこしたる田うた哉  
おもひかねて苧桶に老の田唄かな  
田植唄嫁に拍子をすよめけり

加州沼水國にかへり申さる  
に  
かへる山雪のしら山夏ながら

豫州松山法秀寺南嶺和尚に  
わかるゝ詞

月日は百代の過客にして、  
行きかふ人も旅人也と、さ  
ればいくかぎり人のうちに  
てかく寢食を俱にするは、  
ひとかたならぬ因にや、去

ば、再會たのみありと、別  
れにのぞみ互に手をとりにて  
一笑す

相蚊屋に何かくす事夏の月  
己亥夏偶浪花舊國余與同上  
洛到草津驛而分手時有歌

共是東西過客人  
同行千里日相親  
別離今朝暫分手  
再會尙期明日辰

豫章南嶺草

あぢさるや人はいつまで同じ事  
線繡花の飛鳥川にや生ぬらむ

丸裸これほど暑きことはなし  
あつき日や濱に下魚の算をなす

周茂叔畫

ひとり聞く時や蓮のひらく音  
から網の岡にほいなし夏の月  
涼とる舟漕ぎぬけてなつの月  
道問へば川にそへよと夏の月  
ある人の文拾ひけりなつの月

二柳菴東行に申遣す

古會部のあるじも扉をひら  
き、山崎の坊様も夜具のさ

たに及ばむは、このたびの  
行脚なるべし

(一)古會部は能因、山  
崎は宗鑑をさす

留守つかふいほりはよもや夏の月  
東西夜話に支考の曰、かどり火にかじか  
や浪の下むせび、かどり火におどろかす  
魚はあまたありながら、むせぶといふ一  
字をよせていはど、かじか小海老のほか  
あるべからず、句は其魂を見、本情をと  
るべし

ある人云、風雅の理窟といふはいかに、  
曰風雅にりくつなし、おのくこころの  
理窟なり、人の心をまなぶべし、句を學  
ぶべからずとなり  
水室守七世の夏にあひにけり  
むろもり近くめしなば消えぬべし



なきさしてにべなき蟬の行方かな

鳴きつくす終りや蟬の水調子

一 つねに風流の心なき人も、ものの善  
きあしきに感じて、おもはず秀逸の句あ  
り、遠江の國にある人の子をうしなひ  
て、そのひととせのめぐり來し頃

去年まで叱つた瓜を手向けけり

かく千萬のあはれをふくませ申出しと  
や

葉をもれて涼しや瓜のひざがしら

雪中庵の畫讚からす瓜の一

軸丸形氏へ遣すとてうら書

に

我園の夕くれなるぞからす瓜

はつ茄子公家ひと口にまるりけり

ほの明の箱根こしたりはつ茄子

手にふれば瑠璃やくもりて初茄子

あつ盛の畫

はつ茄子いづこに薄刃あてゝ見む

ぬれて猶雨の水鶏のさやかなり

一 雪中庵云、其角がつけ句に毛抜にも

名を給ふ君が世とあるは、かの尾州なご

やの毛抜師南方といへり、孔明出師の表

に、深く不毛の地に入て今南方定と云

云、不毛といふよりして、むかし近衛殿

下の被下し名なりと

たとへ盡しの榮耀にもちの  
皮といふ事を

京の人や銚見にのほる東山

祇園會

我子にて候へあれにはこの兒

宵かざりあれほこの町山の丁

いつはあれど水みる夏の都哉

一 雪中云、句振は我生れのまゝにして

修行ありたし、つくろへるはいやみな

り、土地によらずして、句に都ぶりあり、

鄙ぶりあり、高雄といふ遊女のある田舎

人に異見しけるは、そこにはるなかにて

歴々の御かた也、此ほどは江戸衆のはや

り詞など似せ給ふがいやみなり、よきを

とこと金つかふ人とはやり詞に、傾城は

倦てゐれば、只ありのまゝなるが可愛な

り、其ありのまゝなる人に、おろかなる

はなきものなり、ゆめくゝにせ給ふなど

申せしと、一座せし貫支といへる人の物

がたりなり、かゝるあそびものうち

も、名だかきは心の置所格別なり、しか

らば風雅も

一 希因云、大かたは初のほどもづらし

く、様々と句をねり二の折よりは退屈し

て、いひがちの様になりはてよ、三四の

折より卷の面あらめに、一卷の模様をう



しなふなり、是つれぐくにいへる木のほりの上手といへるは、木にのほる時はいはで、下りる時あやまちせそと、ひたものいひしに似たり

名聞に四條へ出たるすゞみかな

洛の蝶夢浪花に下り申され

し折はじめて逢ひけるに

にぎり江のこゝろ遣ひもはちすかな

今は三十餘年の知音なり

雪中二世吏登居士二十五回

通題 江戸深川要津寺

定基法師のことのはも、け

ふの法蓮におもひいでられ

て  
本堂に蓮のかけさす夕日かな  
さらし井やをとこ世帯のけふはとて

入江子を悼む

酒ひやす泉には唯月ばかり

奥州せのうへ等舟出店の賀

呼井戸に猶手がらある清水哉

さらし井や家のうちなる六玉川

一書林何がしわづらひて、心地死ぬべ

くおほえしに、菩提所の和尚を請じ、末

期の安心をすゝむるあらましにて、懇

ろに後生の大事を述べられけり、なにが

しむつかしきをのこにてありければ、お

もき枕をあけ、様々の御しめしありがたく存候也、ひとつ御たづね申度事の候

は、みな死候跡にて野おくりの節、御引

導と申す事きく、さだめて能所へまるる

事を、御教被下候事に候はむが、折角仰

聞られても、其時は息たえ耳もなし、生

きたる人のみ承り候、あはれ御情には只

今仰下されたしと願ふ、和尚すつとたち

て、佛前にありける法然上人の一枚起請

をとりよみ聞せ、これ有がたき所へ行く

道中記なりと被申、病人大にさとり、扱

扱けつこうなる道中記にてこそ候へ、有

がたし有がたしと息のかぎり念佛し、往

生をとけ申しける、これ書林に對して題のうごかぬ處なり

手枕や町のいづこに井をさらす

川狩や半日無爲の境に入る

ほとけとは魚狩るとき心の心なり

雲抱て夕立こゆる北のうみ

三五粒蓮に落ちけり夏のあめ

夕立や江戸は傘うりあしだ賣

加賀の紫狐はし立へ行く

先に立つ丹波太郎や道しるべ

阿波加賀江戸の風士十餘輩

荒陵以下の天曉院にあそび

て、見わたる名所古跡を題

(一)丹波太郎は雲の名



にとりほ句するに、天王寺

舍利拾ふたもとは玉の風かをる  
ひるがほや轍にくほむ作りみち  
鼓子花やかくれて住める女蜘蛛  
ひるがほや眼の玉のちりてのち  
一 淡々猫を飼ひけるに、我喰ひけるめ  
し夜菜などを、我箸にて分遣し、膳の脇  
にてくはせけり、門人の曰、先生餘りな  
る不行跡の飼せられやうなり、猫のくせ  
あしく成候はむと、淡笑て曰、さればと  
よ、はじめ二三匹の猫は随分と行儀に  
飼ひつけ、首玉なども奇麗に諸事めし遣

の女どもの取計たりしが、いづくへかぬ  
すまれ、十日と内の用にたよす、必竟う  
つくしく飼ひたつる故、人もほしがる  
也、依て此猫は飼ひしはじめよりかくあ  
しく育てたる故、一二度は盗まれたれど  
も行儀あしき故追ひかへされしと見ゆ、  
いづれも能く御考候へ、猫は所詮ねずみ  
の書物を荒すをふせぎの役が専一なり  
と見る時は、餘事にかまはず、唯鼠の役  
といふ所が脇のつけ所なり、俳諧も又か  
くの如し、こゝが眼字、それが其題の専  
といふ事を見さだめたし  
風吹てひるがほの花みつけたり

夕がほに角力が母のすがたみむ  
夕がほや戻つた牛の嗅で見

勢州白子山観音堂奉納江戸

升屋貞國勸進の畫馬

禮まるり彌ひらけめうがの子  
抱かごやかくしかねたる山かづら  
不二庵の句に、頑に貞女立  
てぬく水鶏哉とありしに、  
句兄弟せむとて

手もさよじ兄の抱籠ころぶとも  
抱かごやたしか妹は玉はよき  
むしほしや紙魚追ひながら物書す  
むしほしや立ちいづる戸も桐柳

花見小袖うつりにけりな葛水に  
むしほしや鈍く傳へし腰の物  
一 ばせを翁の文に、他の短をつけおの  
が長をあらはす事なかれ、人をそしりて  
己にほこるはいやしき事也とかよれし、  
今世の中大かた蕉翁の教を守るといへ  
ども、この遺訓を守るもの百人にひとり  
ふたりならむ

名越夕被

子をつれて茅の輪を潛る夫婦かな  
夕かぜや夏越の神子のうす化粧  
形しろや戀しき肌もふれきなむ  
五十ぐしに鱧の烟かよるなり



(一)梅酸云々は、曹操の兵士湯に苦みし時、近くに梅林ありと欺きて一時の湯を醫せし事をいふ

洛の几童はじめて相見しけ  
ころ時  
これからの實になる秋を隣かな  
なるみ千代倉鐵叟予がもと  
にたづね來ませる折の文を  
こよにうつす  
難波がた安井舊國のぬしは、もとよりの  
ちなみ深かりければ、此處に至らばたび  
のつかれをも息めむなど、伴なふものに  
もかたりなくさめて、夜舟の蚊をうち拂  
ひ拂ひ、漸三津の濱邊にあがり、大江の  
あるじをたづねけるに、予が出版をまち  
まうけ給ふの志あさからずなむ侍れば、

誠にさくやこの花の都人の情、かのから  
國の梅酸のそらごとにはあらず、その厚  
きを謝して一句をつどり賀し侍る。

乾く日も更に

なにはの梢かな

己卯中夏日

藏 六 岡

七十二叟書

○以下下巻

(一)正徹「なか、く」に見ぬ唐土の鳥はいでじ桐の葉もとせ秋の夜の月

西山宗因に俳諧の去嫌を問ふに、因  
曰、むかし昌琢新式を講せられしに、何  
はななに嫌ふ、他は准之と云々、この准  
之とあるが第一要語なり、其准之とあ  
る、准する人の了簡よきもあしきも其人  
の旨に依る、俳事又准之と申されしとか  
元日のうら打つ風やけさの秋  
形しるやあとに流るゝ秋の水  
大坂やまつりの跡の秋のかせ  
秤口のにしに聞えてけさの秋  
秋立つや持佛の箔の目にかより  
民家  
かつしりと歌に音ありけさの秋

桐ちるやうめの曆の下の巻

駝鳥といへるものを

桐ちるやみぬ唐土の鳥はみせ

けふと暮れして二日のかけも秋の月

なりひら清女などのこと

葉を思ひて、枕の草紙の趣

にしたがふ

彦星よこれ牧方の馬やらう

ほしあひや石ともならで待課せ

中に落つる星や七日をよしの川

しのぶれどあの光也ほしの戀

御祓せし水にもあらず天の川

ある妓家にてほし合を